西　山　遺　跡

1979

岡山県真備町教育委員会

特殊器台 1

はじめに

岡山県西南部に位置する真備町――――昭和27年旧村合併により町名を“吉備真備公”の誕生の地でもあり、また終焉墳墓の地であることから、この偉大な郷土の先賢の遺徳を追慕する意味で真備(マビ)町と命名された。タケノコ、ぶどう、柿…等を特産物とする完全農村としてのかつての真備町も時代の流れとともに昭和47年頃から人口増加の現象が生じ現在ではこういった特産を有する農業面と、ベットタウンとしての面との二面をもった真備町となっている。人口も町規模としては県下最高の20,000余名を数えるになり町内各地で開発が進められてきている。こうした地域開発と同時に山の緑は姿を消し、河は濁りかつての美しい自然は急激に変貌しており、幾多の文化遺産が消滅していくことは残念至極であります。中央で又、地方で文化財の保護、保存と開発のバランスが強く叫ばれ報道される所以であります。当町に於ても“真備町地域開発事業の調整に関する条例”を定め開発基準を明確化しこれに対処しております。

今回、開発業者が新王子団地宅地開発事業を発表し町当局と覚書をかわし、事業開始と同時に11tブルドーザーのけたたましいエンジンのうなり、数日後土器の端片数点がみつかり、開発業者の協力のもとに即時開発事業を中止し、岡山県教育委員会文化課のスタッフのご指導とご協力をいただき、事業主体者、関係団体と当該事業地内の埋蔵文化財の保存協議を重ねてまいりました結果、できうる限り精密な調査とより正確な記録の作成を期し、発掘調査を岡山県教育委員会文化課のプロスタッフの方々にお願いし昭和52年4月から昭和52年7月までの4か月間に渡り実施しました。また一方、町教委としてもこの学術的調査の重要性と郷土の古代史の解明に役立つことを考え町内各小中高校と一般町民に連絡その広報につとめました。

現在ではその姿を再び見ることが出来ないこれらの遺跡をこの報告書により学術研究、文化財保護と活用のための一助となるべく活用していただければ幸甚です。

終りになりましたが、本発掘調査にあたり終始献身的なご協力を賜わった岡山県教育委員会文化課の方々、事業主体者の大木建設㈱その他関係機関の方々、地元協力者の方々に厚く御礼を申し上げます。

大木建設㈱新王子団地文化財発掘調査委員会委員長
真備町教育委員会
教育長　服部　毅

例　　言

1. 本調査報告書は、大木建設㈱新王子団地文化財発掘調査委員会が事業主体者である大木建設株式会社より委託を受け実施した新王子団地建設に伴う吉備（きび）郡真備（まび）町箭田（やた）所在の西山（にしやま）遺跡の発掘調査の概要である。
2. 発掘調査は第１次確認調査を昭和52年４月13日～４月20日、第２次本調査を昭和52年５月９日～７月14日にわたり実施した。
3. 発掘調査にあたっては真備町文化財保護委員会、大木建設株式会社、ならびに地元関係者から多大な協力を頂いた。
4. 出土遺物、記録写真、実測図等は岡山県教育委員会文化課分室（岡山市西古松）に保管している。
5. 発掘調査の諸記録は第１次確認調査を正岡睦夫、山磨康平、第２次本調査を山磨、文化課職員平井勝が担当した。

   調査にあたっては、県内研究者諸氏の現地視察を得、多大な御助言をいただいた。

   なお、第２次調査後半には文化課職員葛原克人、井上弘、下沢公明、岡田博、岡本寛久の各氏に遺構実測、地形測量等に多大な援助を頂いた。また、遺物の写真撮影についても井上弘氏の協力を受けた。
6. 本報告書の執筆は第１章、第２章、第３章第１節を正岡、山磨、第３章第２節、第４章を山磨、平井がそれぞれ分担して行った。

   報告書作成にあたっては文化課分室職員諸氏の多大な協力を得た。
7. 本報告書に用いた標高はすべて海抜高であり、方位はすべて磁北である。
8. 本報告書に掲載した地形図は建設省国土地理院長の承認を得て同院発行の25000分の１地形図を複製したものである。　承認番号昭和54中複、第70号

目　　次

第１章　　調査の契機と経過…… 1
　　Ⅰ　　調査の契機…… 1
　　Ⅱ　　調査の経過…… 1
第２章　　地理的・歴史的環境…… 5
　　Ⅰ　　地理的環境…… 5
　　Ⅱ　　歴史的環境…… 7
第３章　　発掘調査の概要…… 9
　第１節　　第１次調査の概要…… 9
　第２節　　第２次調査の概要……13
第４章　　結　　語……41

図　目　次

第１図　真備町位置図（S＝$\frac{1}{1320000}$）…… 5
第２図　西山遺跡周辺（小田川下流域）遺跡分布図（S＝$\frac{1}{25000}$）…… 7
第３図　西山遺跡周辺地形図（S＝$\frac{1}{4000}$）…… 8
第４図　確認調査トレンチ配置図（S＝$\frac{1}{1500}$）……10
第５図　遺構配置図（S＝$\frac{1}{900}$）……11
第６図　Ⅰ区　全体図（S＝$\frac{1}{400}$）……12
第７図　Ⅰ区　１号墳平面図（S＝$\frac{1}{200}$）……14
第８図　Ⅰ区　１号墳周溝土層断面図（S＝$\frac{1}{30}$）……15
第９図　Ⅰ区　１号墳出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）……15
第10図　Ⅰ区　No.7 土壙墓実測図（S＝$\frac{1}{30}$）……16
第11図　Ⅰ区　No.7 土壙墓出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）……17
第12図　Ⅰ区　No.8 土壙実測図（S＝$\frac{1}{30}$）……18
第13図　Ⅰ区　１号住居址実測図（S＝$\frac{1}{80}$）……19
第14図　Ⅰ区　１号住居址出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）……19
第15図　Ⅰ区　２号住居址実測図（S＝$\frac{1}{80}$）……20
第16図　Ⅰ区　２号住居址出土遺物（S＝$\frac{1}{3}$）……21
第17図　Ⅰ区　No.1・2・3・4 袋状ピット実測図（S＝$\frac{1}{30}$）……22
第18図　Ⅰ区　No.5・6・9・14袋状ピット実測図（S＝$\frac{1}{30}$）……23
第19図　Ⅰ区　No.1・2・3・5・6・9 袋状ピット出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）……25
第20図　Ⅰ区　No.14袋状ピット出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）……27

第21図　II区　全体図（S＝1/400）……28
第22図　II区　2号墳平面図（S＝1/200）……29
第23図　II区　2号墳出土遺物（S＝1/4）……30
第24図　II区　3号墳付近平面図（S＝1/200）……31
第25図　II区　3号墳出土遺物（S＝1/4）……32
第26図　II区　No.11・12土壙墓実測図（S＝1/30）……33
第27図　II区　No.13土壙墓特殊器台棺実測図（S＝1/15）……折込み
第28図　II区　特殊器台1実測図（S＝1/5）……37
第29図　II区　特殊器台2実測図（S＝1/5）……38
第30図　II区　3号住居址実測図（S＝1/80）……39
第31図　I区　1号墳壺形埴輪復元図（S＝1/6）……42

図　版　目　次

（本文対象頁）

巻頭図版　特殊器台1……34
図版1－(1)　西山遺跡遠景（西から）……9
図版1－(2)　調査区全景（北から）……13
図版2－(1)　I区　1号墳周辺（南から）……13
図版2－(2)　I区　1号墳墳端部（東から）……13
図版3－(1)　I区　1号墳西側周溝遺物出土状況（南から）……13
図版3－(2)　I区　1号墳西側周溝遺物出土状況（東から）……13
図版4－(1)　I区　1号住居址（北から）……18
図版4－(2)　I区　No.14袋状ピット（北から）……27
図版5－(1)　I区　2号住居址（南から）……20
図版5－(2)　I区　2号住居址土層断面（西から）……20
図版6－(1)　I区　袋状ピット　1－No.1（南から）2－No.2（東から）3－No.3（南から）4－No.4（北から）5－No.6（北から）6－No.9（南から）……21
図版7－(1)　I区　No.5袋状ピット（北から）……24
図版7－(2)　I区　No.5袋状ピット土層断面（西から）……24
図版8－(1)　I区　No.7土壙墓遺物出土状況（西から）……17
図版8－(2)　I区　No.7土壙墓（西から）……17
図版8－(3)　I区　No.7土壙墓遺物出土状況（南から）……17
図版9－(1)　II区　2号墳周辺（南から）……28
図版9－(2)　II区　南半部全景（北から）……29
図版10－(1)　II区　3号住居址（南から）……40
図版10－(2)　II区　No.10溝状遺構（北から）……40

図版11－(1)　II区　No.12・13土壙墓（西から）……34
図版11－(2)　II区　No.11土壙墓（西から）……32
図版12－(1)　II区　No.12土壙墓（西から）……34
図版12－(2)　II区　No.12土壙墓土層断面（西から）……34
図版13－(1)　II区　No.13土壙墓特殊器台出土状況（南から）……37
図版13－(2)　II区　No.13土壙墓特殊器台出土状況（西から）……37
図版14－(1)　II区　No.13土壙墓特殊器台接合部（北から）……37
図版14－(2)　II区　No.13土壙墓特殊器台接合部（西から）……37
図版15－(1)　II区　No.13土壙墓特殊器台下半部（南から）……37
図版15－(2)　II区　No.13土壙墓特殊器台完掘状況（西から）……37
図版16－(1)　I区　住居址・袋状ピット出土遺物……25
図版16－(2)　I区　No.9袋状ピット出土遺物……25
図版16－(3)　I区　No.7土壙墓出土遺物……17
図版17－(1)　I区　1号墳出土遺物（左）・II区　3号墳出土遺物（右）……15・32
図版17－(2)　II区　2号墳出土遺物……30
図版18－(1)　II区　No.13土壙墓特殊器台2……38
図版18－(2)　II区　No.13土壙墓特殊器台1文様……37

第1章　調査の契機と経過

I　調査の契機

昭和52年2月下旬、吉備郡真備町箭田地内の低丘陵上の宅地造成現場から地元の高本力氏により土器片の採集が行われ、町教委より県教委文化課に対応について緊急の連絡が入った。同2月28日、県教委文化課職員による現地踏査を行った結果、ほぼ南北に延びる標高30m程の低丘陵上の用地内北端部の一部を表土掘削中に広範囲にわたり土器片の散布が認められたもので、一部では新たに溝状の落込みの遺構も確認された。造成工事は開始早々であったため遺跡の破壊は最小限にくい止められていたが、開発区域内の低丘陵全面が竹藪となっており遺物の散布も確認できず、範囲も把握できない状況であった。このため事業主体者である大木建設と今後の造成工事の工程と遺跡の対応について協議をつめる必要があり、とりあえず工事を一時中止することとなった。

当該開発計画は大木建設が昭和50年5月21日町を経由し県建築課に開発申請を提出し、昭和50年2月25日開発許可となった新王子団地建設に伴うもので丘陵部と谷部の総面積38600㎡にのぼり、このうち約20000㎡が遺跡の発見された低丘陵部分にあたっていた。

現地踏査の翌3月1日には事業主体者である大木建設株式会社と県教委との具体的な協議が行われ、まず遺跡の発見届の提出を行うことと、遺跡の発見された場所から南に延びる低丘陵上のトレンチ調査を行い遺跡の範囲の確認を行うことで合意がなされた。

II　調査の経過

発掘調査は県教委、町教委、事業主体者の三者による文化財調査委員会を設け、大木建設株式会社との間に発掘調査の委託契約を結び昭和52年4月下旬より約一週間の予定で第1次の確認調査を開始した。確認調査は丘陵部全面が竹藪のため重機を使用し、丘陵尾根及び斜面に総延長260m、総面積520㎡を測るトレンチを設定し遺構の検出を行った。

当初第1次調査の結果いかんでは相当日数のかかる大規模な調査を行うことも予想され、第2次の調査については別途確認調査結果後に協議し実施する計画であった。しかし確認調査結果からは、丘陵の大幅な地形の変化などにより遺構の残存状況も悪く、かつ遺跡の広がりも限定されたため、引き続き第2次の全面調査を同調査委員会で行うことになった。

第2次調査（本調査）は昭和52年5月9日から第1次調査によって遺構の確認された丘陵尾根を中心とした約3000㎡の地域を第1次調査と同様に重機を使用した表土掘削による全面調査を行い、7月14日をもって約2か月間にわたる調査を終了した。

主要検出遺構は調査区北半のI区から古墳時代前半期の古墳1基、土壙墓1基　弥生時代中期末～後期の竪穴住居址2軒、袋状ピット8基、同南半のII区から、古墳時代前半期の古墳1基、土壙墓2

基、弥生時代後期の竪穴住居址1軒等であった。また実質調査面積はⅠ区1580㎡、Ⅱ区1150㎡、それに確認調査の520㎡を含めて計3250㎡であった。

＜日 誌 抄＞

1977年

5月9日　器材搬入、Ⅰ区　1号墳上から表土除去を開始。

5月10日～14日　Ⅰ区　1号墳周辺から南に表土除去。

5月16日～17日　Ⅰ区　南半の表土除去、2号住居址検出。

5月18日　Ⅰ区　表土除去ほぼ終了。

5月19日～21日　Ⅱ区　2号墳周辺表土除去開始。

5月23日～28日　Ⅰ区　1号住居址掘下げ。

5月30日　Ⅰ区　1号住居址土層断面実測と柱穴の掘下げ。Ⅱ区　2号墳表土除去。

6月1日～9日　Ⅰ区　2号住居址と袋状ピット群の掘下げ。

6月11日　Ⅰ区　袋状ピット群の土層断面実測、2号住居址写真撮影。

6月13日～14日　Ⅰ区　1、2号住居址の柱穴、貼床の掘下げ。

6月15日　Ⅰ区　袋状ピット群の平面図実測、写真撮影、Ⅱ区　2号墳検出。

6月17日　Ⅱ区　2号墳周溝掘下げ中に特殊器台を伴う土壙墓検出、No.14溝状遺構周辺掘下げ。

6月18日　Ⅱ区　No.13特殊器台棺清掃、調査区南半掘下げ。

6月20日　出土2例目の特殊器台棺の新聞発表。

6月21日～22日　Ⅱ区　No.13特殊器台棺の実測・写真撮影、3号住居址掘下げ。

6月23日　Ⅰ区　1号墳周溝掘下げ（円墳の可能性が生ず）、Ⅱ区　No.13特殊器台棺取上げ。

6月25日～27日　Ⅰ区　1号墳周溝掘下げ、遺物出土状況写真撮影、1号住居址全景写真撮影、No.1・5土壙墓補足、Ⅱ区　No.12土壙墓土層断面実測。

6月29日　Ⅰ区　1号墳、2号住居址写真撮影、No.14袋状ピット掘下げ。

6月30日～7月1日　Ⅰ区　1号墳周溝、1・2号住居址、No.7土坑墓No.14土壙墓補足、Ⅱ区　3号住居址柱穴掘下げ、2号墳墳丘トレンチ。

7月5日　測量用のレベル移動。

7月6日～8日　この間、文化課職員の応援を受け各遺構の測量を行う。以後、最終日まで応援を受ける。

7月11日～12日　Ⅰ区　No.14袋状ピット清掃、写真撮影、Ⅱ区　各遺構の清掃、写真撮影と測量。

7月13日　Ⅰ区　2号住居址の補足、Ⅱ区No.13土壙墓、3号住居址測量、写真撮影。

7月14日　Ⅰ区　2号住居址測量補足、北から全景写真撮影、本日をもって調査終了。

大木建設㈱新王子団地文化財発掘調査実施要項

1　調査名　大木建設㈱新王子団地文化財発掘調査

2　場　所　岡山県吉備郡真備町大字箭田字東畑1208番地他

3　調査の目的及び概要

1）目　的　大木建設㈱新王子団地工事に先だち用地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録保存及び所要の措置を講ずるものとする。

2）概　要　第1次調査――トレンチ調査により遺跡の範囲及び遺構の確認調査を実施する。
第2次調査――第1次調査により確認された遺跡の範囲を全面発掘調査を実施し記録保存措置を講ずる。

4　調査の実施

調査の実施は調査委員会を設置し実施する。

1）名　称　大木建設㈱新王子団地文化財調査委員会

2）構　成　委員長、副委員長、委員、監事

3）実施期間

第1次調査――昭和52年4月13日～5 月20日

第2次調査――第1次調査終了後協議のうえ決定する。

4）そ の 他

イ）調査実施に際し大木建設㈱は表土掘削に要するユンボ（オペレーター付）を提供するものとする。

ロ）調査の万全を期するため県文化財保護審議委員の指導助言をうける。

5　調査経費

第1次調査分　600,000円

第2次調査分　第1次調査終了後協議のうえ決定する。

6　調査結果の報告

調査終了後文化財調査実施報告を提出する。

7　調査概要の刊行

埋蔵文化財発掘調査概報を刊行する。

大木建設㈱新王子団地文化財発掘調査委員会

役名	氏名	所属
委員長	服部　毅	真備町教育委員会教育長
副委員長	塩見　篤	県文化課課長補佐
委員	塩尻　幾一	真備町文化財保護委員長
〃	浅野　嘉一	〃　委員
〃	川井喜久雄	真備町教育委員会社会教育課長
〃	光吉　勝彦	県文化課文化財二係係長
〃（調査員）	正岡　睦夫	県文化課文化財保護主事
〃（〃）	山磨　康平	〃
監事	樋野　隆三	大木建設㈱作業所長
〃	井上　和二	真備町教育委員会総務課長
事務局長	川井喜久雄	真備町教育委員会社会教育課長
事務員	岡本　久	真備町教育委員会社会教育主事
〃	若林　三成	〃
〃	田渕　和子	真備町公民館主事

第２章　地理的・歴史的環境

I　地理的環境

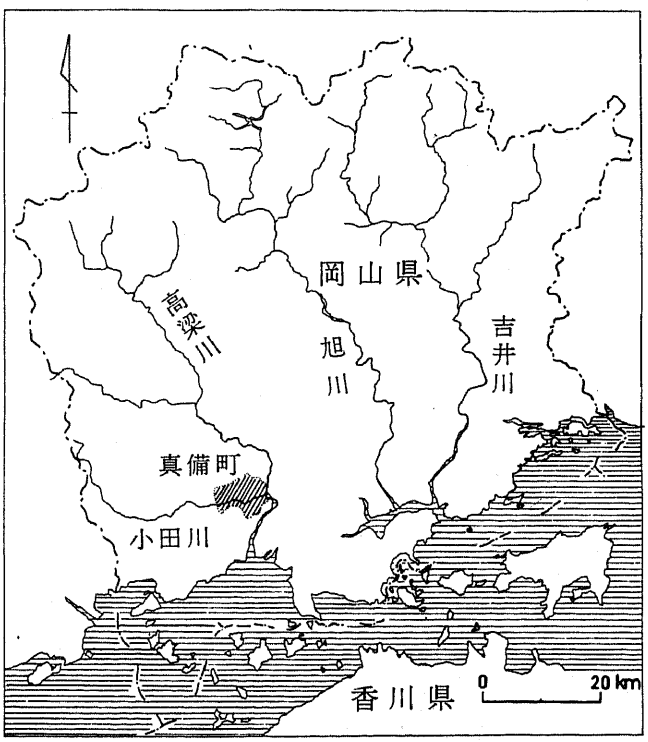
西山遺跡は岡山県吉備郡真備町西山に所在する。真備町は旧下道郡に属し、高梁川を河口から約12kmさかのぼったところで、総社平野の西端部に位置する。小田川は東西にのびる平地の南東部で高梁川と合流するが、この北方には高梁川によって形成された自然堤防が展開し、弥生時代以降の集落址がひろがっている。西山遺跡の立地する小山塊は低丘陵で四方に小支丘がひろがっている。西山遺跡はそのうち、もっとも南へのびる支丘で細長い。上面は海抜約30mで、平地との比高は約20mである。小山塊の南は東へひらける沖積平野がひろがり、西方は箭田(やた)の谷が奥深く入っている。東から北西にかけては末政川の流れる谷となる。

真備町は筍の産地としても有名であるが、西山遺跡のある丘陵にも、かつて、竹が植えられ、筍の生産が行われたことから、表面が削られて下方へ覆せられたため、斜面は階段状を呈し、地形が改変されている。尾根の頂部付近は旧状を保ち、やや平坦な地形である。支丘の北と南は若干高くなり、平坦面も広い。

II　歴史的環境

西山遺跡の周辺には多数の遺跡が分布している。弥生時代の集落址は山裾あるいは丘陵先端部に所在する。西山遺跡にも弥生時代の住居址が検出されたが、谷を狭んだ西方には半田遺跡があり、熊野神社の南へのびる尾根先端部付近からも弥生中期の土器が表採されている。(註１) 今後、更に多くの集落址が発見されるとおもわれる。小田川を少しさかのぼった真備町呉妹(くれせ)からは流水文銅鐸が出土している。

西山遺跡では、弥生終末期の埋葬址も検出されているが、周辺には、近年、発掘調査された黒宮大塚が西方２kmにある。調査報告では「早期



第１図　真備町位置図 (S = 1/1320000)

古墳」としてあるが（註２）、従来、弥生終末期の墳墓とされてきたものと同種であり、小型の竪穴式石室と特殊器台・特殊壺・祭祀用土器等が多数検出された。類似した遺跡は、北側丘陵上に総社市新本立坂遺跡（註３）、北側丘陵の東端部に総社市下原伊予部山遺跡、高梁川をわたった対岸の低丘陵上に総社市三輪宮山遺跡（註４）、同丘陵南部に都窪郡清音村三因鋳物師谷１・２号墳（註５）等がある。

古墳時代では集落址は山裾を中心にひろがっていると推定されるが、古墳は著名なものが多い。西山遺跡にも古墳があるが、同山塊の東端部には竜王山古墳がある。墳形は一辺約17ｍの方墳で、竪穴式石室があり、多数の鉄器を出土した。小田川をわたった二万の山裾には二万大塚古墳がある。墳形は前方後円墳で、円筒埴輪を出土する。西側の谷を入ったところには、巨大な横穴式石室を有する箭田大塚古墳がある。墳形は前方後円墳ともみられているが、周辺は竹林のため削平され、現在は直径46.7ｍの円丘である。石室の全長は19.1ｍで、玄室内には３基の組合せ式石棺がある。出土品には須恵器・土師器・馬具類・直刀・柄頭・鉄鏃・金環・切子玉・勾玉、円筒埴輪等が多数ある。後期の群集墳は多数あり、ほとんど横穴式石室を内部主体とする円墳である。

歴史時代では西方山裾に奈良時代頃の吉備寺址があり、礎石が残っているほか、多数の瓦を出土している。また、小田川を約６kmさかのぼった小田郡矢掛町東三成の南側山裾からは下道国勝・国頼母夫人（吉備真備の祖母）の銅製蔵骨器が出土している。

註１ 間壁忠彦・間壁葭子・藤田憲司「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉敷考古館研究集報』第13号、1977

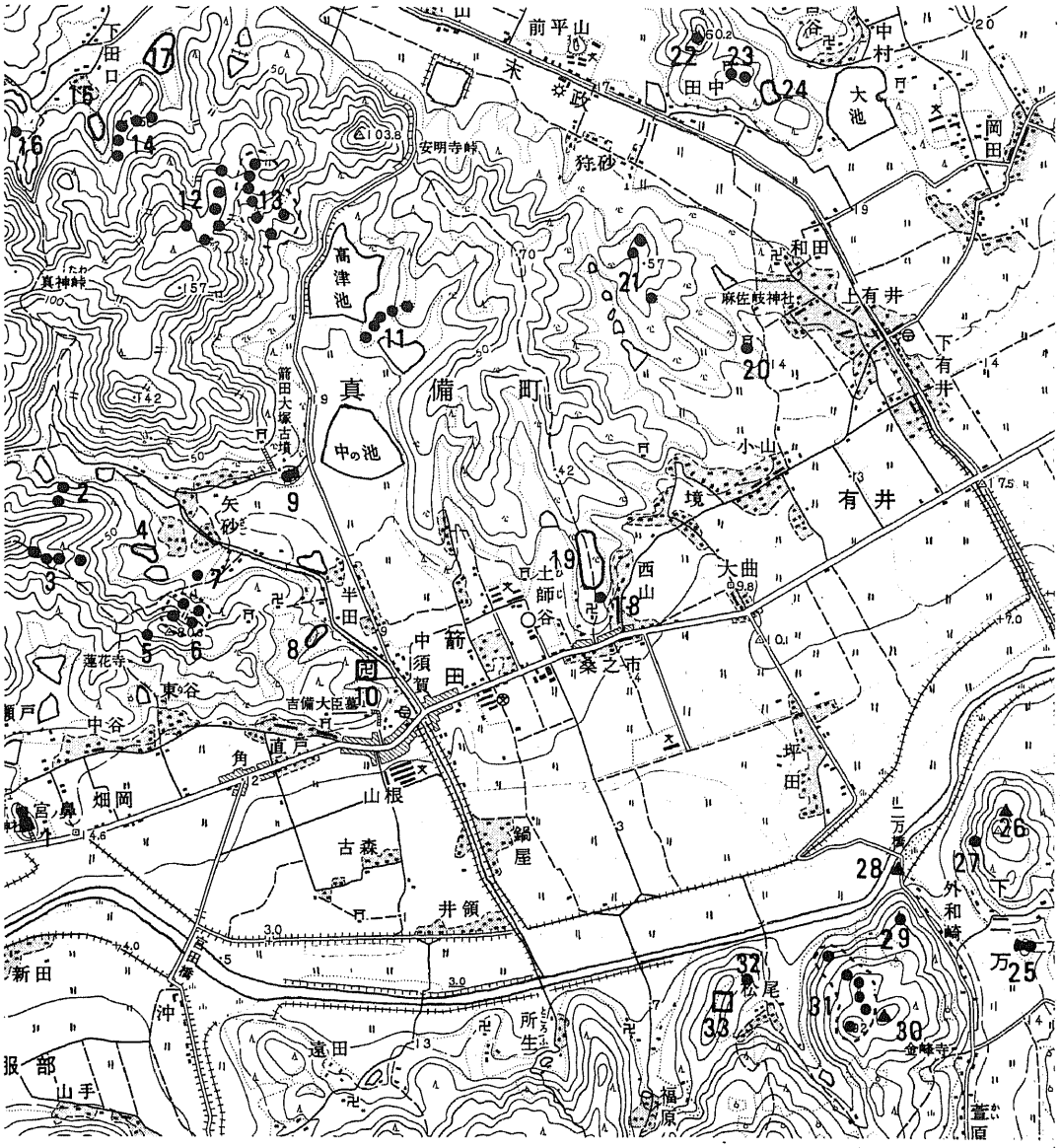
註２ 註１に同じ

註３ 近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」『考古学研究』第13巻３号、1967

註４ 高橋　護「三輪山墳墓群の調査から」『岡山県総合文化センター館報』No.39、1963

註５ 春成秀爾・葛原克人・小野一臣・中田啓司「備中清音村鋳物師谷１号墳墓調査報告」『古代吉備』第６集、1969

小野一臣・間壁忠彦・間壁葭子「岡山県清音村鋳物師谷２号墳出土の土器」『倉敷考古館研究集報』第13号、1977



第2図　西山遺跡周辺（小田川下流域）遺跡分布図（S＝$\frac{1}{25000}$）

1　黒宮大塚（前方後方墳）
2　矢砂大池古墳群2基
3　向坂古墳群3基
4　山田遺跡（弥生）
5　古墳（箱式石棺）
6　古墳（横穴式石室）
7　土地衛池古墳
8　半田遺跡（弥生・古墳）
9　箭田大塚（前方後円墳）
10　吉備寺址
11　皿池古墳群
12　古墳群（横穴式石室）6基
13　高津池古墳群7基
14　後期古墳群5基
15　五幣奥タタラ址
16　真神1号墳
17　羽原遺跡（弥生）
18　剣塚（横穴式石室）
19　西山遺跡
20　竜王塚（方墳）
21　有井古墳群3基
22　田中塚
23　田中古墳群
24　宮造田遺跡（古墳）
25　二万大塚（前方後円墳）
26　山崎遺跡（弥生）
27　山崎1号墳
28　新二万橋遺跡（弥生）
29　外和崎古墳
30　金峯寺所蔵石斧出土地
31　大谷大塚古墳群6基
32　松尾古墳
33　松尾廃寺址

第３図　西山遺跡周辺地形図 S＝1/4000　·——·——· 開発区域　調査区

第３章　発掘調査の概要

第１節　第１次調査の概要

１．調査期間

昭和52年４月13日～４月20日

２．調査面積

トレンチ総延長　約260m、総面積　約520㎡

３．調査概要

調査対象の丘陵上は全て竹藪で、当初予想したより後世の開墾による地形の削平が著しくトレンチ設定も尾根上に限定された。また、竹藪のため人力によるトレンチ掘下げが困難と予想され、機械力（ユンボ）の使用による掘下げを行わざるを得なかった。

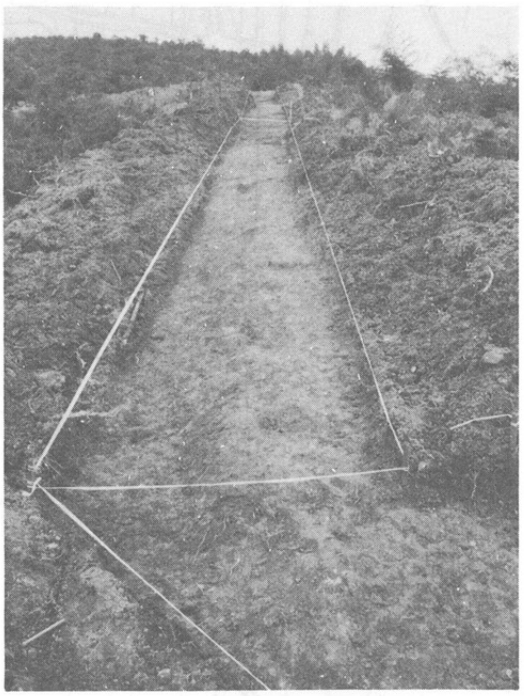
トレンチ調査による検出遺構は、弥生時代後期の住居址３、円形のピット２と古墳時代前期の古墳２基であった。弥生時代後期の遺構は丘陵、尾根上のほぼ全面を使用した集落址と想定され、他に遺構の存在が予想される。古墳はともに埴輪片を伴っており、あい前後して築造された古墳時代前期の古墳と推定される。

４．検出遺構

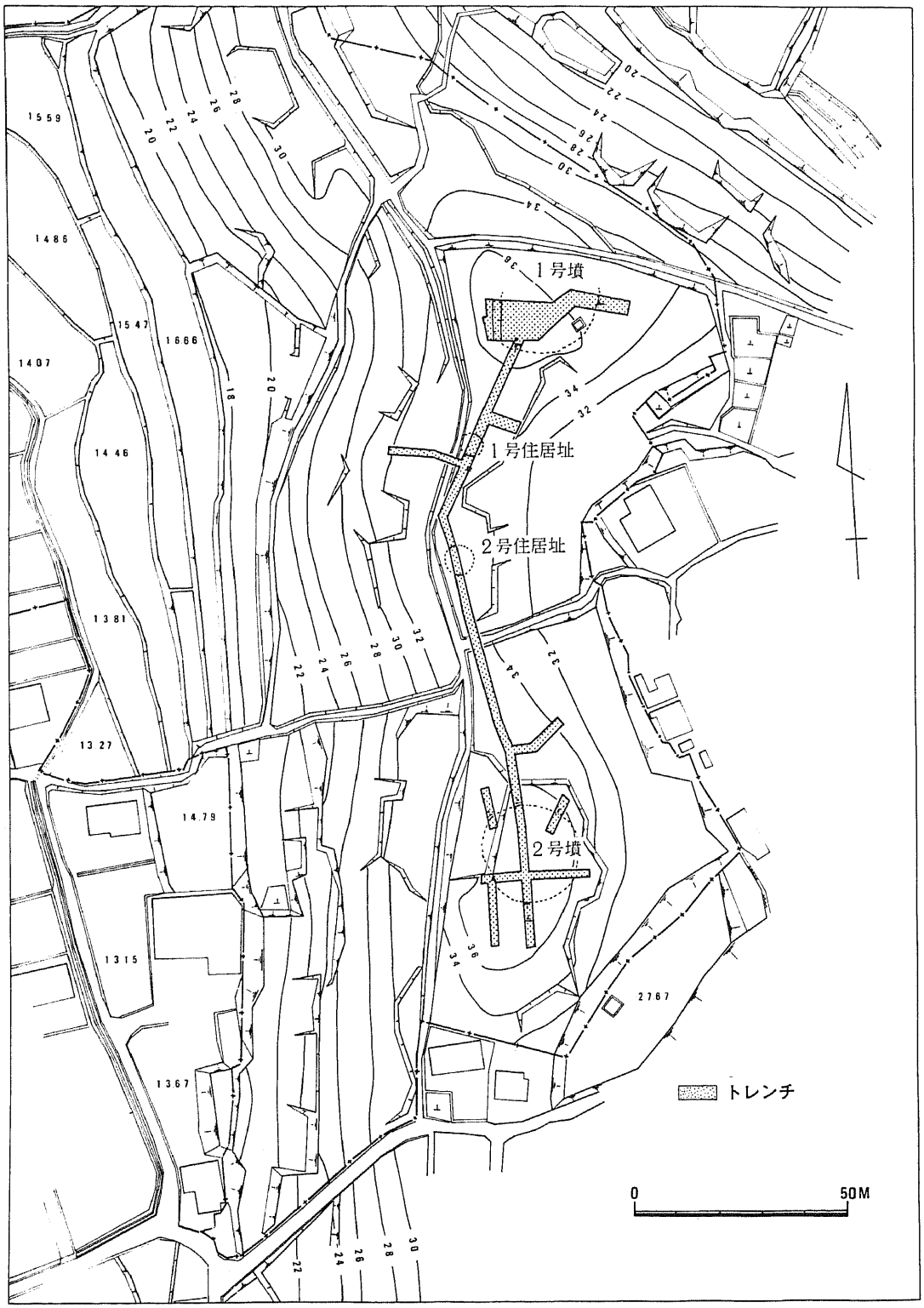
１号墳　　遺跡発見の端緒となった遺構である。トレンチ調査の結果、一辺22m程度の方墳(2次調査から円墳と確認）で東と西側に周溝を検出し、南側では削り出しの基底部を確認した。主体部は竹藪の造成で、すでに消失していると考えられる。遺物は、埴輪片が比較的多く出土している。

２号墳　　径20m程度の円墳と推定され、トレンチにより周溝を確認した。主体部は、１号墳と同様に竹藪の造成ですでに消失している。遺物は、埴輪片が周溝内より出土している。

１号住居址　　丘陵尾根で検出した径５m程度の竪穴住居址である。遺物は弥生式土器片が出土している。



第１次確認調査状況



第4図　確認調査トレンチ配置図（S＝$\frac{1}{1500}$）

2 号住居址　　1 号住居址と同様に、丘陵尾根で検出した径 6 m 程度の竪穴住居址で、残存状況は良好である。遺物は弥生式土器片が出土している。

3 号住居址　　用地南端の丘陵尾根上で 2 本の柱穴を検出した。柱穴の状況等から高床倉庫址（2 次調査から重複住居址を確認）と推定される。遺物は柱穴内より、弥生式土器片が出土している。

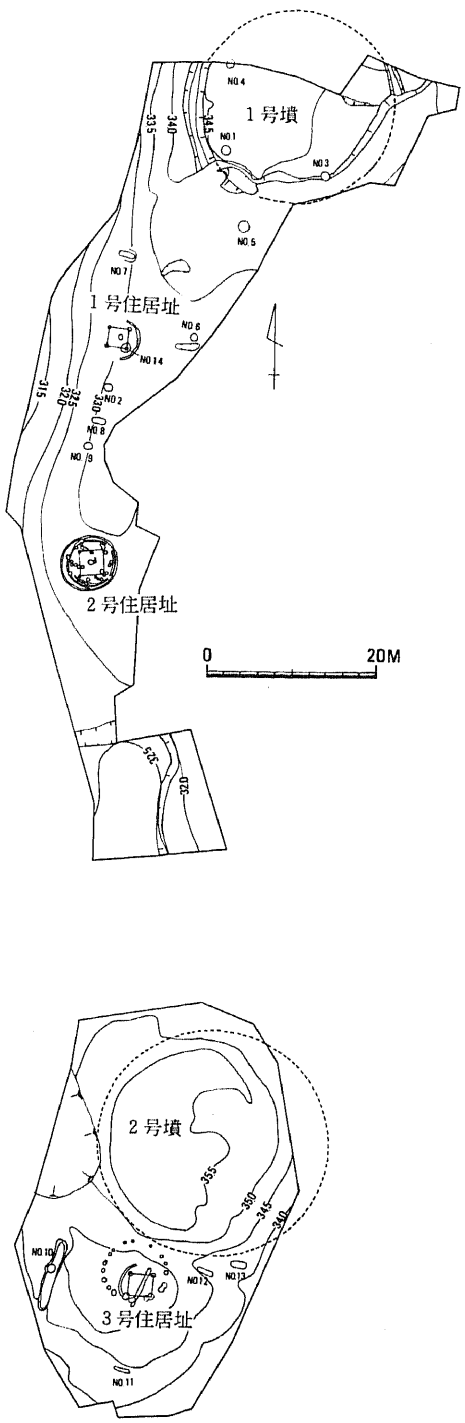
ピット 1　　1 号墳の墳丘内に検出した60× 100 cm程度の楕円形のピットである。出土遺物等から弥生時代の貯蔵用ピットと考えられる。

ピット 2　　1 号住居址のやや南側の丘陵尾根に検出した径 1 m 程度のピットである。ピット 1 と同様の貯蔵用ピットと推定される。

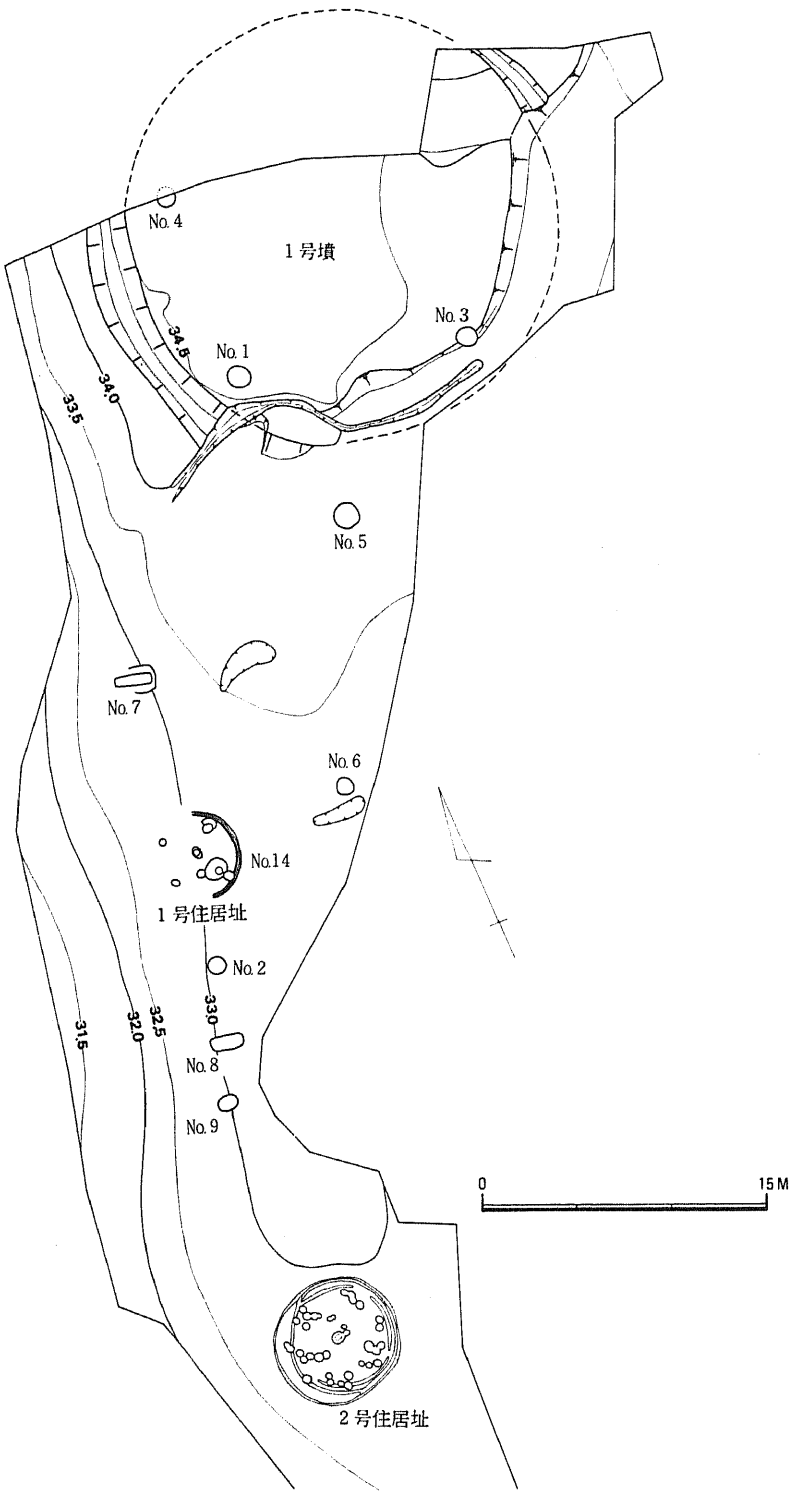
5．第2次調査について

第 1 次調査の検出遺構は、計 7 遺構を数え、集落址と古墳とに大別できる。このうち 2 基の古墳はともに主体部を消失しており、2 次調査では墳丘のみの調査となるであろう。集落址についてはトレンチにより 3 軒の住居址と、これに関連するピットを検出しており、他の住居址等が予想される。

2 次調査の対象地域はトレンチの結果、1 号墳ならびに 1 ・ 2 号住居址を検出した地域の約1.500 ㎡と、2 号墳を中心とした地域の約1.400 ㎡の計2.900 ㎡程度の丘陵尾根を中心とした地域に限定される。



第5図　遺構配置図（S = 1/900）



第6図　I区　全体図（S＝$\frac{1}{400}$）

第2節　第2次調査の概要

Ⅰ　Ⅰ区の調査

北端の1号墳墳丘上から2号墳北側の尾根がせばまり、遺構の確認できなかった空白部分までの間を便宜的にⅠ区とした。この調査区の東西両斜面は竹藪の造成により大幅に地形変化を受けていたために遺構は確認できず、発掘区域は尾根上の平坦部の南北100m、東西最大幅30m部分に限定され1580㎡程の面積を拡張した。主要検出遺構は確認調査によるものも含め古墳1基、土壙墓1基、竪穴住居址2軒、袋状ピット8基等で、2号住居址以北の調査区域に集中していた。

(1)　1号墳（第7・8図）

調査区北端の標高35.2mを測る尾根上の高所に位置し、本遺跡発見の端緒となった古墳である。造成中に発見された土器片の散布ならびに溝状の落込みは本古墳の西側周溝部分にあたっていたが、墳丘北半部分がすでに造成工事により破壊されていたため、古墳の全ぼうは把握できなかった。

調査前の地形観察からは墳形は確認できず1次調査のトレンチと墳丘部の拡張により、東西周溝を検出したのみで主体部・封土とも消失していた。南側墳端部もかなり複雑に地形変化を受けており、地山を掘り込んだ東西の残存周溝以外はほとんど外形をとどめていない状況であった。

周溝は西側に12m、東側に4.5m残っておりともに幅3～4m、深さ20～30cmを測り凸レンズ状の断面を呈していた。周溝内には土器片がかなり認められたが、ほとんどが細片となり、周溝上層に堆積している状況が認められた。

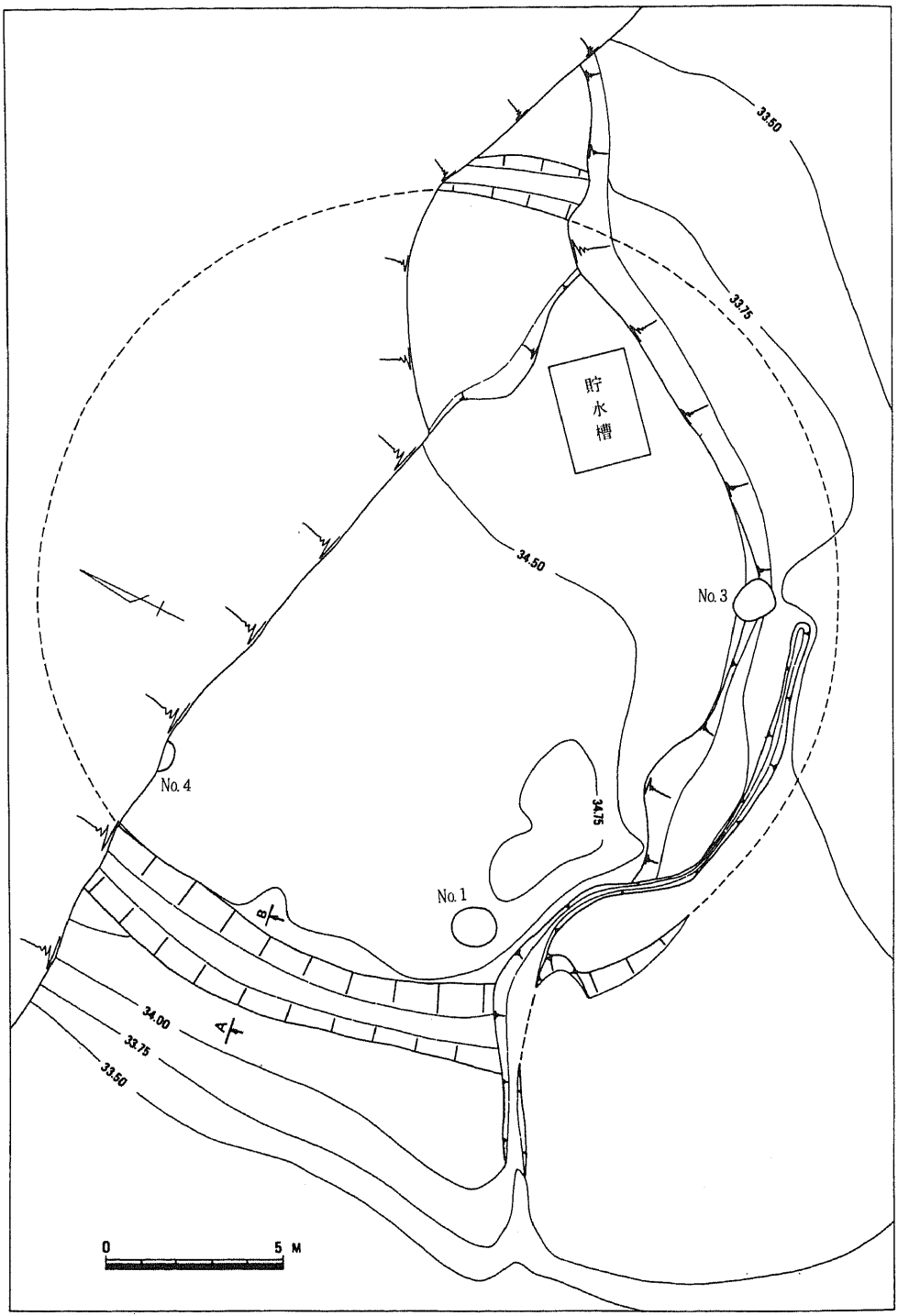
以上の検出結果から本古墳は径24m程を測り、地山整形の基底部より70cm程の高さが残存しているのみの円墳であることが判明した。

出土遺物（第9・31図）

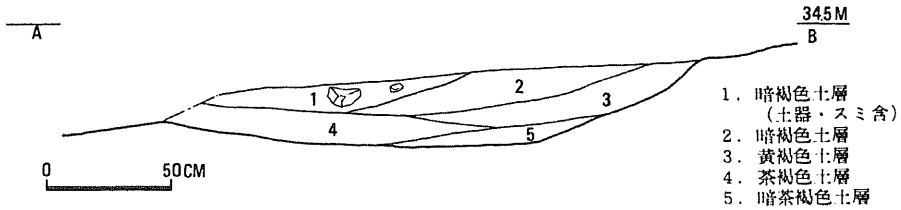
1号古墳の墳丘はすでに削平されてはいたが、東西に一部残存していた周溝内より土師器が出土した。土師器は周溝床面より浮いており、いずれも細片となっている。出土状態からして墳丘上にあったものではなく、むしろ周溝内に並らべられていたか、あるいは意識的に破砕して廃棄したものと考えられる。

土師器は前述のごとく細片のため全体の器形については不明であるが、断片から推定すると、長い二重口縁から逆八の字状の頸部を有し、胴部は丸みをもつ肩からやや長めの胴下半となる。底部は焼成前の穿孔が施されている。以下各破片の説明を加える。

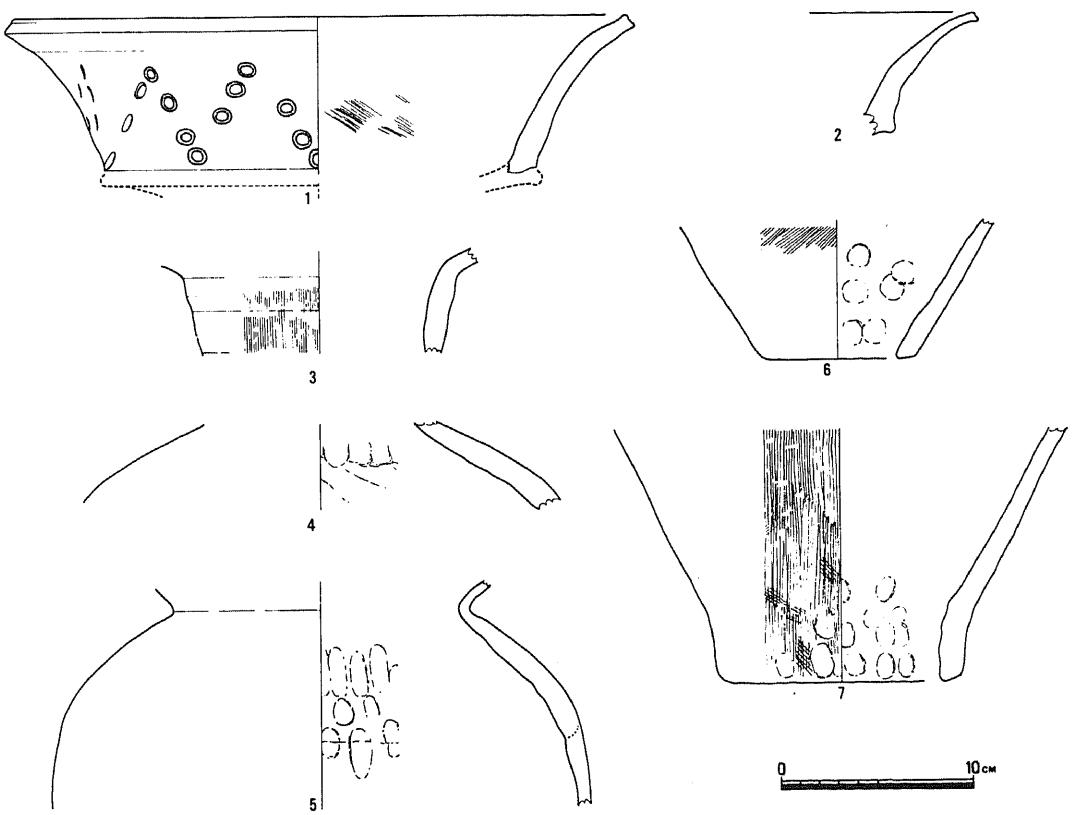
1・2は口縁部で、強く外反しながら立上がっている。口縁端面には横ナデによる凹部が認められる。外面には円形刺突文が裾歯文状にめぐる。3は頸部で、逆八の字状を呈し、外面は強い横ナデによる凹凸がめぐっており、刷毛目が残っている。4・5は肩から胴部であるが、内面は指頭圧痕とヘラケズリが認められる。6・7は底部で、いずれも焼成前に穿孔されており、外面は刷毛目、内面には



第7図　Ⅰ区　1号墳平面図（S＝$\frac{1}{200}$）



第8図　Ⅰ区　1号墳周溝土層断面図（S＝1/30）



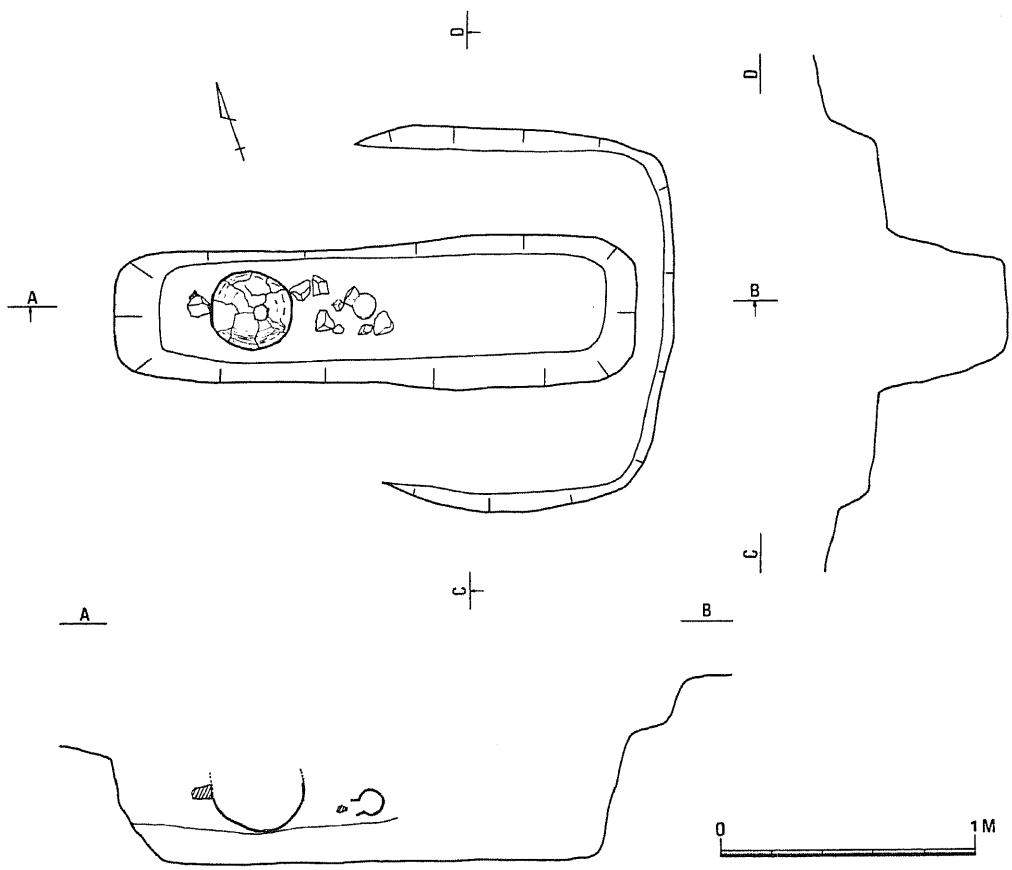
第9図　Ⅰ区　1号墳出土遺物（S＝1/4）

指頭圧痕が残る。

さてこれらの土器全体の形状をみると、一見して上半は朝顔型埴輪に類似しているが、壺型埴輪と称されるものであろう。県内でこのような類例を知り得ないが、一般的にこの時期の壺型埴輪は球形化しており、本例のように長い胴部を有するものは類例が少ないと考えられる。時期については口縁部の形状などからは布留式、あるいは多少古くなる可能性のあるものと思われる。類例の少ない現状ではこれ以上断定することは差しひかえたいが、円筒埴輪をもつ2号墳よりは古い時期に築造された古墳であることには違いなく、特殊器台棺に続く時期のものと推察される。

(2) No.7土壙墓（第10図）

1号墳の南西13m、標高33m付近の丘陵西斜面に検出した二段掘りの土壙墓である。主軸は尾根陵線にほぼ直交し、E－20°－Sを測る。掘り方上段は西半部が削平され消失しているが幅1.5m、深さ



第10図　I区　No.7土壙墓実測図（S＝$\frac{1}{30}$）　　L. 33.3m

20cmを測る。下段は隅丸長方形の平面を呈し全長205 cm、幅60cm、深さ50cm、床面で、全長175 cm、幅40cmを測る。床面はほぼ水平面を保ち、小口溝、棺痕跡は確認できなかった。

出土遺物は土壙西半に床面から10cm程の間隔を置き数個の拳大の礫と伴に、明らかに設置した状況の底部穿孔壺形土器の下半部と、横向きの小形丸底坩の完品の2点が出土した。

いずれも土壙内に大幅に落込んだ状況は認められず、元来、出土位置に近い場所に副葬された土器類と推察される。

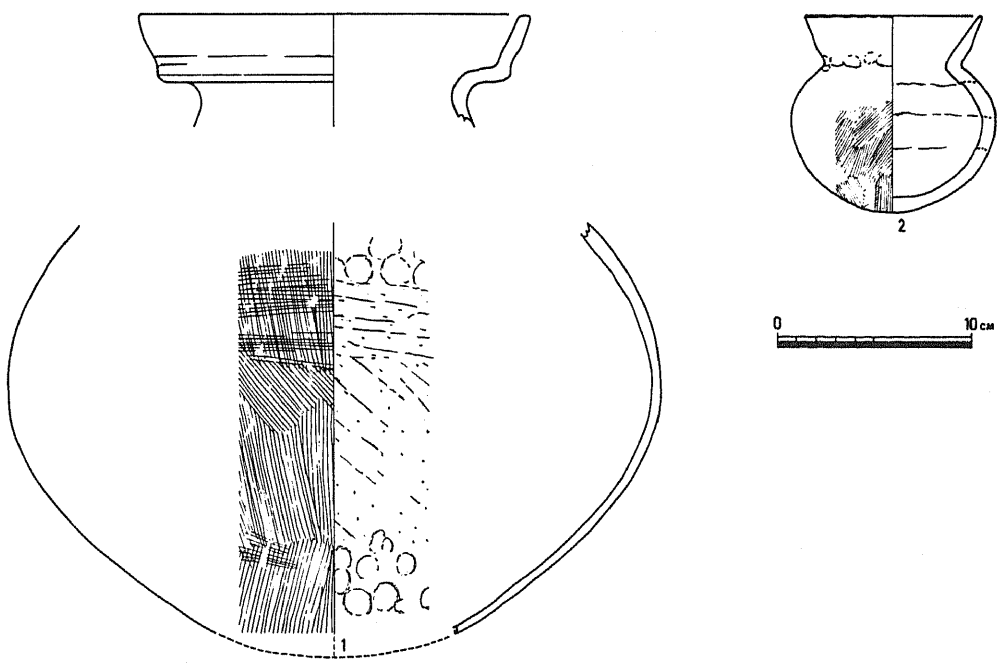
出土遺物（第11図）

土壙墓内より出土したもので、1は頸部より上が壊れていたが、2は完形で副葬されていた。

1は二重口縁を呈する壺で、丸底となる。胴部外面は刷毛により、内面は肩部と底部に指頭圧痕が認められるが、その他はヘラ削りによって仕上げられる。

2は小型丸底坩で、胴部はほぼ球形を呈する。口縁部はくの字状に外反する。頸部外面には指頭圧痕が残る。胴部外面は細かな刷毛による調整が行われ、内面はナデているが、粘土ヒモの接合部が明瞭に残っている。

さてこれらの遺物の示す時期であるが、壺の胴部が球形化し、丸底となっていることなどから布留式に近い時期、あるいはそれより多少古いものと考えられる。このことは小型丸底壺が布留式に較べ口縁部が短かく布留式以前のものにより類似していることからも言える。したがってこの土壙墓は1号墳に合前後して築造されたと考えられる。

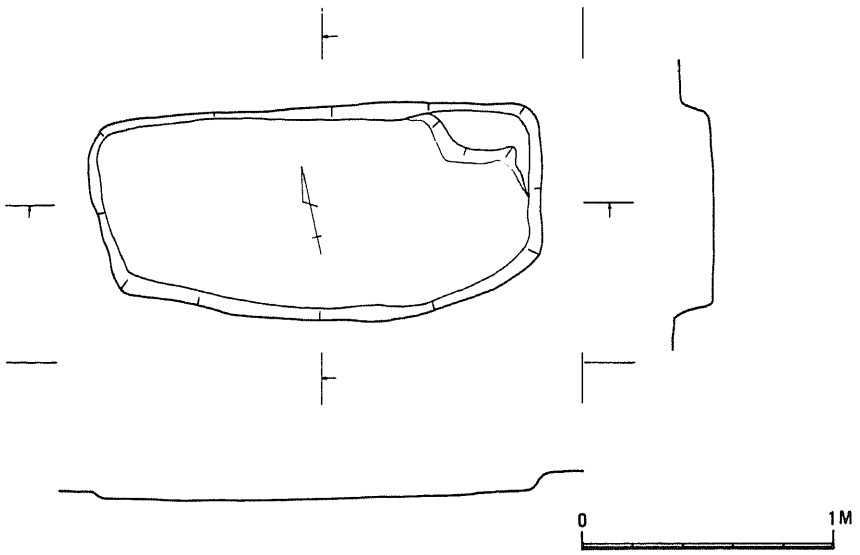


第11図　I区　No.7土壙墓出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）

(3) No.8土壙（第12図）

第Ⅰ調査区ほぼ中央の尾根陵線上に位置し、No.2・8袋状ピットと2～3mの間隔を置き検出した。掘り方は隅丸長方形を呈し、長さ1.8m、幅85cm、深さ5cmを測る。床面はほぼ水平面を保つが、土壙掘り方が非常に浅く遺構の性格については断定できなかった。

土壙内出土遺物は皆無である。



第12図　Ⅰ区　No.8土壙実測図（S＝1/30）　　L. 33.5m

(4) 1号住居址（第13図）

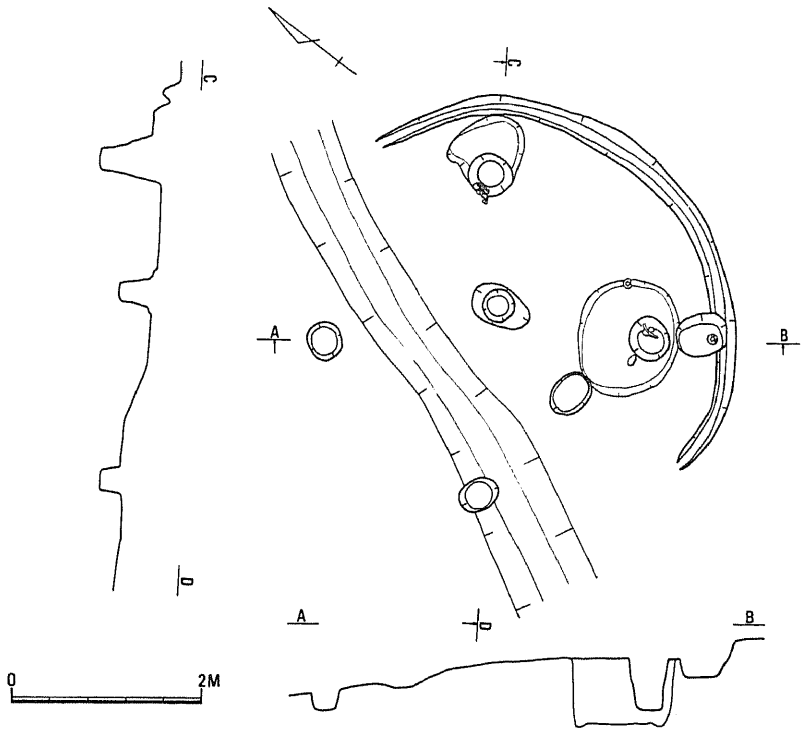
1号住居址は丘陵頂部平坦面から西寄りの斜面部にさしかかる所に位置する。このため丘陵頂部側の半分しか残存していなかった。

住居址は径約5mの円形を呈すると考えられ、壁に接して溝がめぐっている。斜面部の床面はすでに流失しているが、柱穴が残っており、4本柱であったことが考えられる。中央には2段掘りのピットが認められる。住居内には袋状のピットが検出されたが、これは住居址以前のものと考えられる。

出土遺物（第14図）

1号住居址床面より少量の土器片が出土したが、いずれも風化が著しく細片化していた。

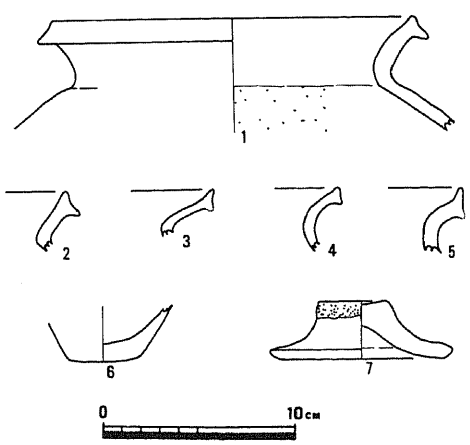
1は甕である。「く」の字状に外反する口縁部は、その端部を上下に拡張し、端面には強い横ナデによる凹部がめぐっている。胴部内面はヘラ削りによる調整がなされている。2～5は口縁部の細片である。いずれも口縁端部は上下に拡張され、その端面には強い横ナデによる凹部がめぐるものであ



第13図　Ⅰ区　1号住居址実測図 (S = $\frac{1}{80}$)　　L. 33.5m

る。口縁部は「く」の字状に外反するが、2・3のようにシャープなものと、4・5のようにゆるやかになるものとがある。6は不安定な底部の破片で、内面はヘラ削りによる調整である。7は脚台である。

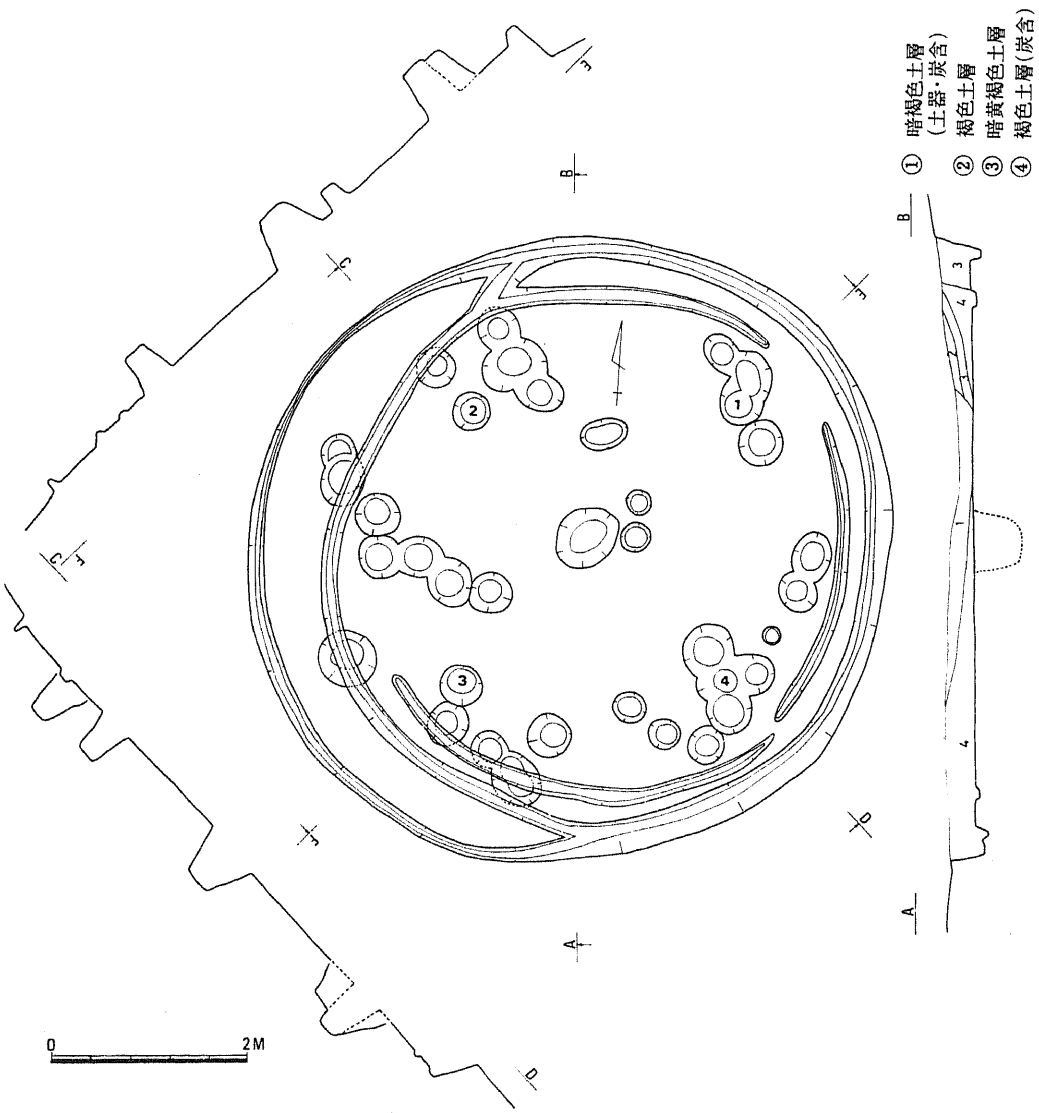
これらの遺物は弥生時代後期後葉のものと考えられる。



第14図　Ⅰ区　1号住居址出土遺物 (S = $\frac{1}{4}$)

(5) 2号住居址（第15図）

2号住居址は1号住居址の20m南側で、丘陵平坦部に位置し、最低3回以上の建替が行われたと考えられる。平面プランは円形を呈し、壁にそって溝がめぐる。一番外側の壁が最大に拡張した段階と考えられ、径約6mを測る。さらに内側にも溝がめぐるが、途中途切れる所もあり、これらの先後関係は明確にし得なかった。柱穴は多く認められるが、それぞれの住居址とそれに伴う柱穴の関係は



第15図　Ⅰ区　2号住居址実測図（S＝1/80）　　L．33.0m

不明であり、4本柱、5本柱、6本柱などが考えられる。

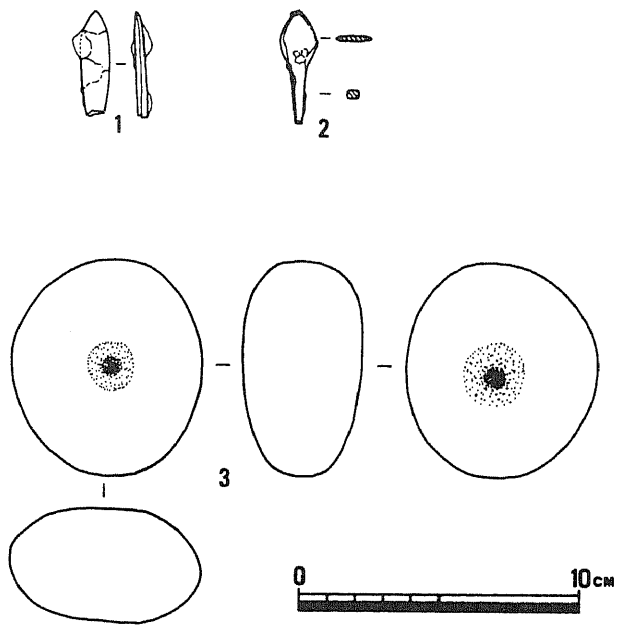
これに対して中央には3か所のピットが認められ、一番大きなものが中央にある。この大きな中央ピット内は炭化物や灰で埋まっていた。

住居内の埋土中には炭化物を多く含んでいた。土器も細片となって含まれているが、まとまって出土しなかった。

出土遺物（第16図）

2号住居址は数回の建替が行われており、内部からは土器と石器、それに鉄器が出土した。土器は弥生式土器で細片化しており、図示することができなかったが、口縁部に数条の凹線がめぐることから、中期末～後期初頭と考えられるものである。なお古墳時代後期の遺構が埋土内にあったものと考えられ、細片ではあるが、まとまって出土した。外反する口縁部を有する甕と考えられ、外面には刷毛目が著しい。

1・2は鉄鏃である。3は凹石で扁平な円礫の両面にわずかな凹みがある。周囲は磨かれている。



第16図　I区　2号住居址出土遺物（S＝$\frac{1}{3}$）

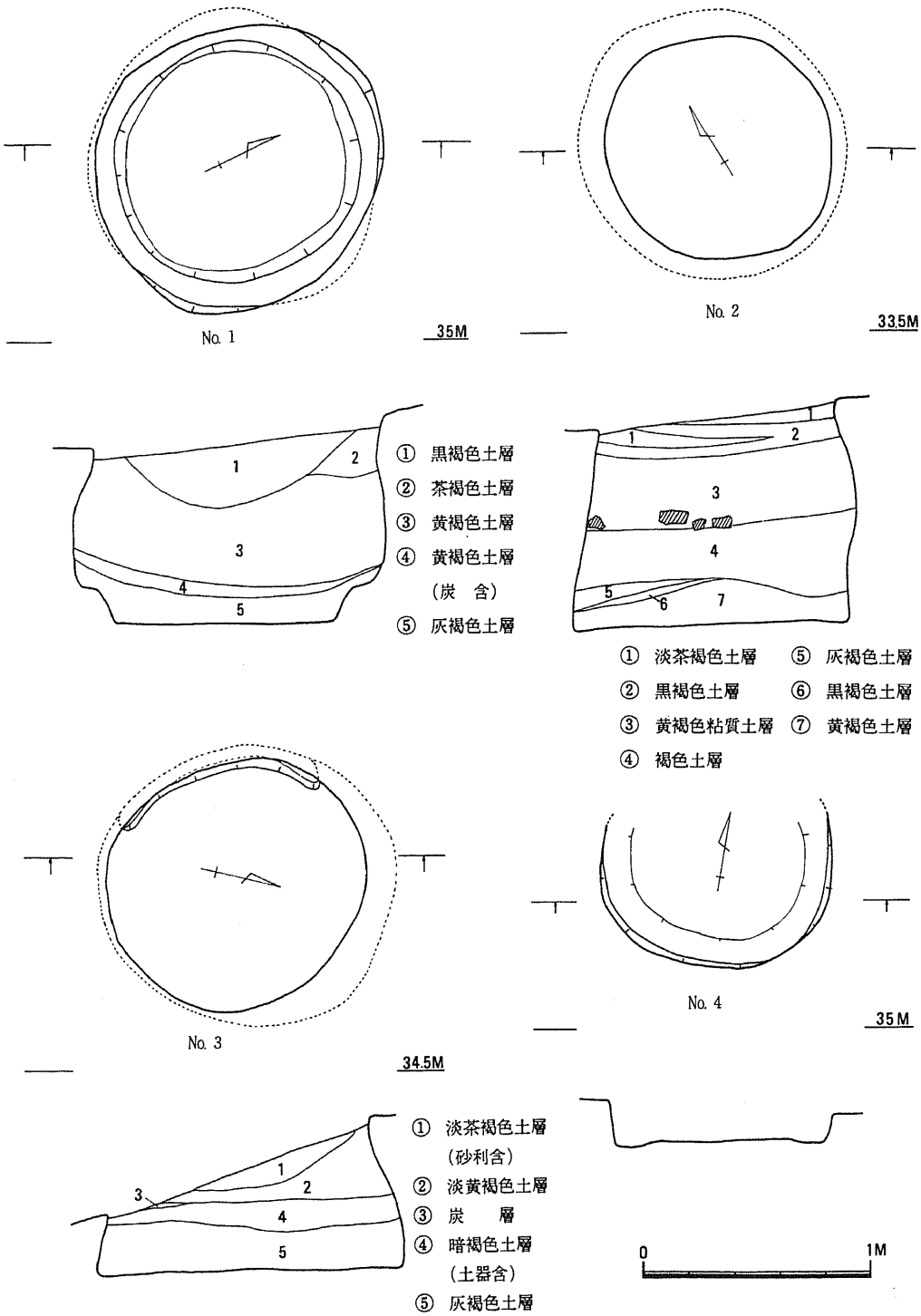
(6) No.1 袋状ピット（第17図）

1号墳墳丘上に検出した上面・床面ともほぼ円形を呈す袋状ピットである。ピット掘り方は地山検出面で径1.2×1.3mを測り、これより20cm下方から徐々に袋状に開き－75cmで袋状掘り方が径1.3mを測る最大径となる。この部分には幅10cm程のテラスを設けて、さらに中央部を15cm程掘り下げ、ほぼ水平な床面を設けている。

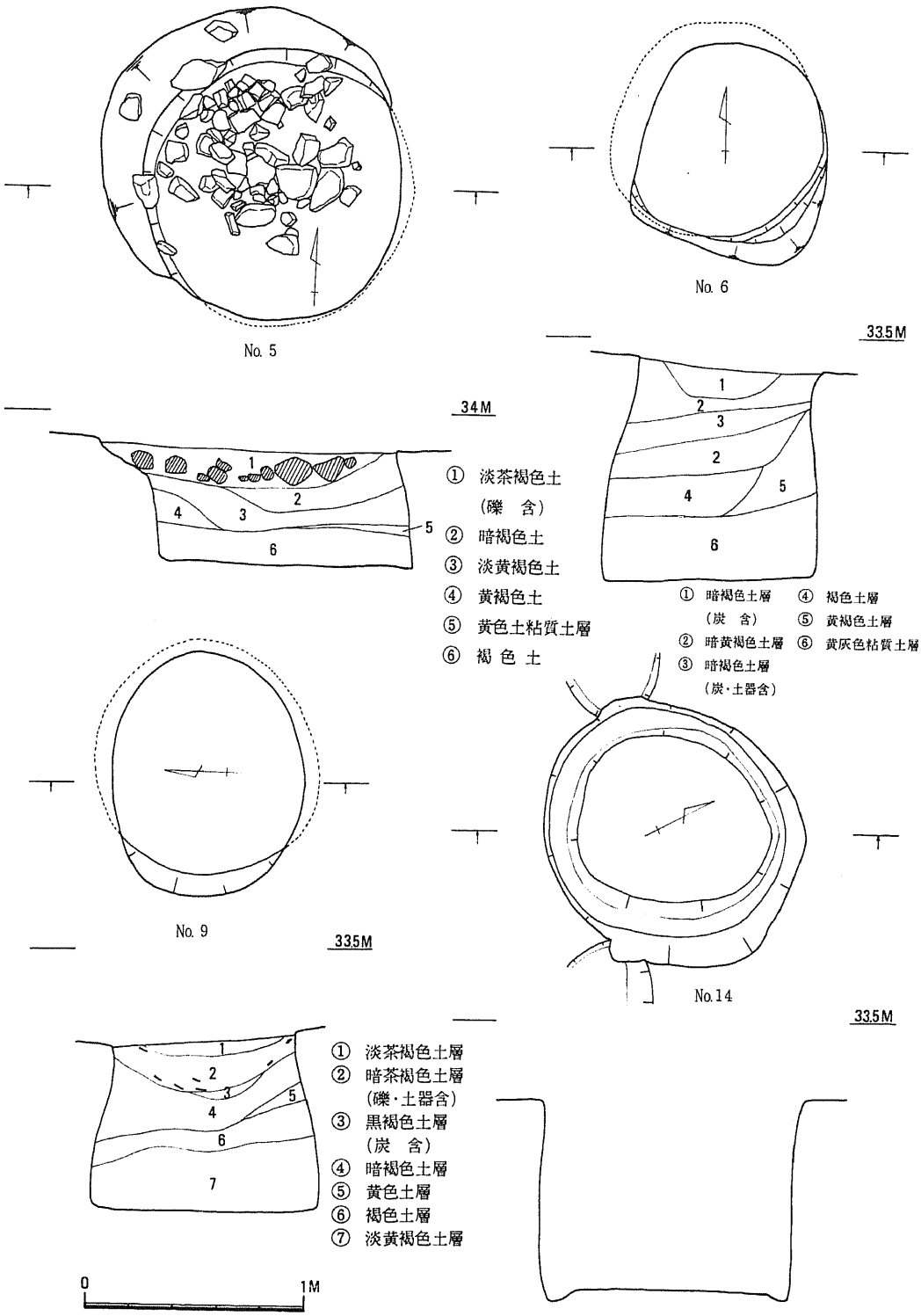
堆積土は5層程確認でき、このうち第1層には黒褐色をなす、やや腐植土に近い土壌がピット中央部にかなり落込んだ状況を呈していた。これ以下の各層は中央がゆるく落込んだ状況を呈すがほぼ一括埋土の状況を呈し、一部にはスミを含む部分も認められた。

出土遺物（第19図）

土壙内から少量の土器が出土した。いずれも口縁端部を上下に拡張し、その端面に凹線がめぐるものである。2は胴部内面下半を篦削りにより調整している。時期は弥生時代中期後半と考えられる。



第17図 I区 No.1・2・3・4袋状ピット実測図 (S = 1/30)



第18図 Ⅰ区 No.5・6・9・14 袋状ピット実測図 (S = 1/30)

(7) No.2袋状ピット（第17図）

1号住居址の南3mの尾根稜線上に検出した上面径1m、床面径1.2m、深さ1mを測る円形の袋状ピットである。掘り方は検出面より下方に向い徐々に開き、床面で最大径となり、周囲が若干下り気味の袋状を呈していた。

ピット内堆積土は下部3層が中央がやや盛り上った状況を示し、中上層に向うにしたがいほぼ水平に近い堆積を示していた。

出土遺物（第19図）

1は壺形土器で、上方に著じるしく拡張された口縁端面に凹線がめぐる。3・4は高杯形土器の筒部と脚部である。筒部には6本を単位とする櫛状工具で条線を施している。脚部は脚端部を上下に拡張し、その端面に凹線をめぐらす。高杯形土器はいずれも外面が丹塗りで、胎土には細砂粒を含み、茶褐色を呈する。これらの土器は少量のため時期を明確にすることはできないが、弥生時代中期末あるいは後期初頭と考えられる。

(8) No.3袋状ピット（第17図）

1号墳南東の墳丘端部に検出した上面径1.1m、床面径1.3m、最大深さ70cmを測る円形の袋状ピットである。傾斜面に検出したため斜めにカットを受け、南側では25cm程と浅いが、No.2ピットと同様に袋状の掘り方を示し、床面で最大径となる。床面中央部はほぼ水平な面を保ち、周囲に向い若干下り、一部に溝状を呈していた。

ピット内堆積土は5層認められ、このうち上部第1層がやや落込んだ状況を示す以外は、ほぼ水平な堆積状況で、一部には炭がかなり認められた。

出土遺物（第19図）

土壙内埋土中より少量の土器が出土した。1の壺形土器は、口縁部内面を強く横ナデし、端部をやや上方へつまみあげている。2は高杯形土器の脚部で、内外面に横ナデによる凹凸が認められる。肥厚した端部外面には凹線がめぐる。これらの土器の時期は弥生時代中期後半と考えられる。

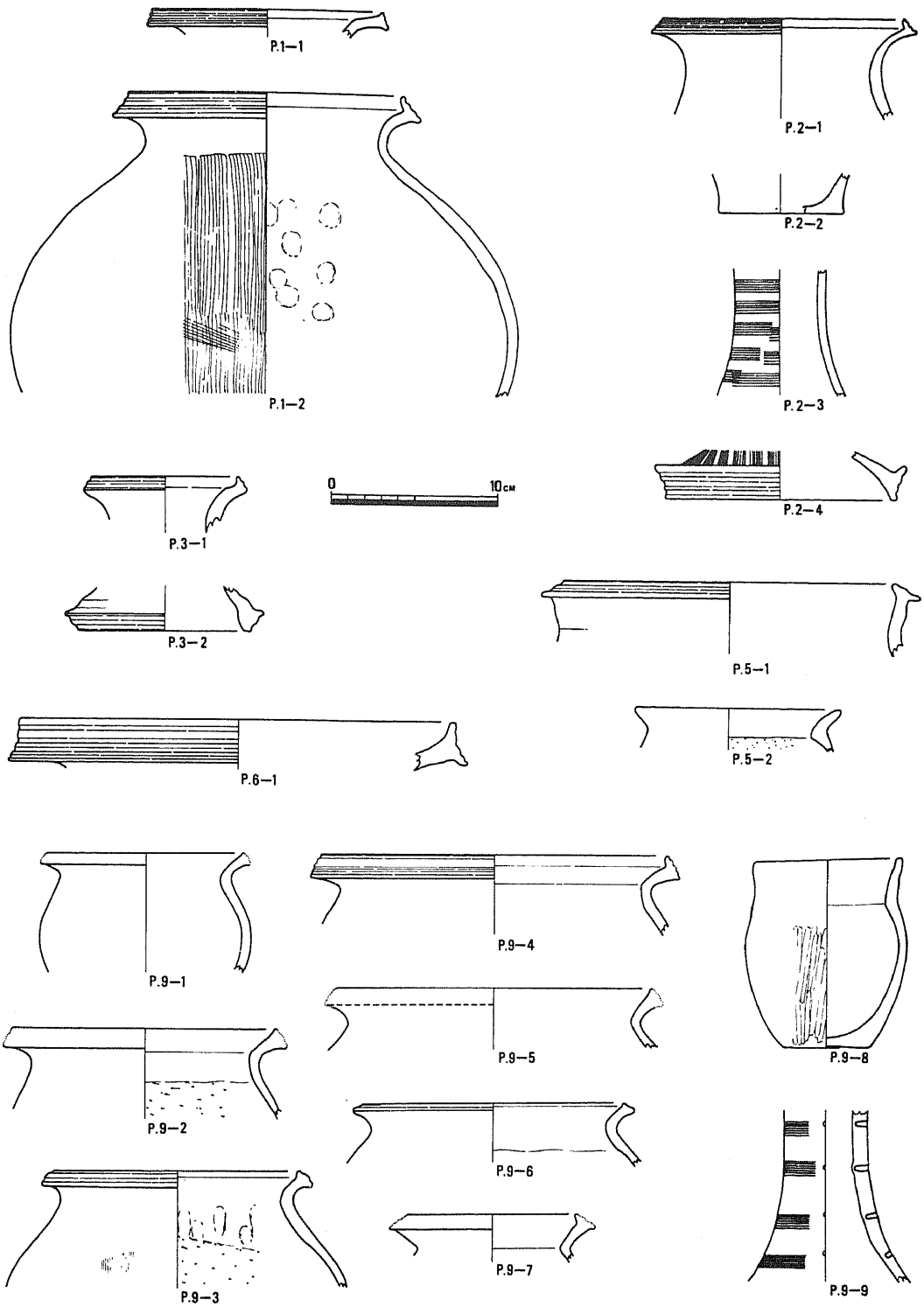
(9) No.4袋状ピット（第17図）

1号墳墳丘上の北西部に検出した上面・床面とも推定径1m、深さ20cmを測る円形のピットである。すでに、北半の$\frac{1}{3}$程は重機による掘削を受け消失し、又、掘り方も大幅な削平からわずかにその痕跡を止める程度であった。

床面周囲に幅10cm程の溝が巡っていること等から他の袋状ピットと同種の遺構と推察された。

(10) No.5袋状ピット（第18図）

1号墳墳丘の南側に検出した上面、床面とも径1.2m、深さ50cmを測る円形の袋状ピットである。



第19図　I区　No.1・2・3・5・6・9袋状ピット出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）

掘り方北西半は下方に向って内に入り、法面を有すが、南東に向っては徐々に袋状に開く形状を呈し、床面では中央部がほぼ水平を保ち、周囲が若干下り気味であった。又、ピット上面の北西半には最大幅25cmの三日月状の浅い段が附随していた。

ピット内堆積土は6層確認でき、このうち第1層には一辺20cm大の角礫から拳大の円礫の混った礫混り入土層が北西部の浅い段からピット上面にかけて認められ、これ以下の各層では、ほぼ均一な土壌が中央部がやや落込んだ状況を呈し、最下層ではほぼ水平な堆積を呈していた。

出土遺物（第19図）

埋土中より細片化した土器が少量出土した。1の壺形土器は頸部がほぼ垂直で、口縁端部端面には凹線がめぐる。2は口縁部がくの字状に外反する甕形土器で、胴部内面は箆削りにより調整されている。時期については、2の土器は新しいが、1は弥生時代後期初頭と考えられる。

(11) No.6袋状ピット（第18図）

1号住居址の東6mの尾根稜線に検出した袋状ピットである。掘り方肩口が一部崩壊し、径85×95cmの不整形な形状を呈し深さ1mを測るが、下方に向っては徐々に円形をなしながら袋状に開き、床面で最大径1mとなる。

ピット内堆積土は6層認められ、このうち第1層が中央が落込んだ状況を示す以外は西に向って傾斜する堆積状況であった。

出土遺物（第19図）

1は壺形土器で、口縁端部を上下に拡張し端面に凹線をめぐらす。胎土に細砂粒を含み、黒褐色を呈す。時期は弥生時代中期末と考えられる。

(12) No.9袋状ピット（第18図）

1・2号住居址間の尾根稜線上に検出した上面径1.1×0.9m、床面径105cm、深さ80cmを測る袋状ピットである。上面肩口が西にやや広がり、楕円形を呈すが、下方に向っては徐々に円形をなし、床面で最大径となる袋状の掘り方である。床面はほぼ水平面を呈し、なんらの施設も認められなかった。

ピット内堆積土は7層認められ、このうち1～3層には、土器・炭をかなり含み、中央がやや落込んだ状況を示し、以下の各層では北に向って傾斜する堆積を示していた。

出土遺物（第19図）

埋土中から多くの土器が出土したが、細片となっており、器表は風化しているものが多かった。

1～8は甕である。これらの甕は口縁部がくの字状に外反し、口縁端部は上下に拡強され、その端面に凹線文がめぐる。多くの凹線は1～2条であるが、4はやや多くなる。風化が著じるしいため、調整については観察不可能なものが多いが、胴部外面に刷毛目を残すもの（3）もある。胴部内面は頸部に近いところまでヘラ削りが行われている。8は小形の甕で、胴部外面はやや粗雑であるが、ヘラ磨きが行われている。

9は高杯形土器の筒部である。6条1単位のクシ状工具で条線をめぐらし、貫通しない円形刺突が4段に施される。

これらの土器は弥生時代後期の初頭と考えられるものである。

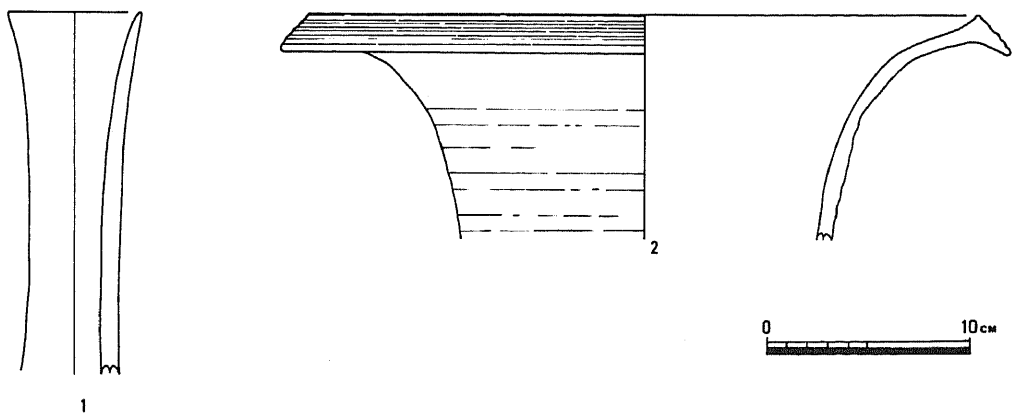
(13) No.14袋状ピット（第18図）

1号住居址内に検出した上面径1.1×1.2m、床面径0.9×1.1m、深さ90cmを測り、ほぼ円形を呈すピットである。壁面は肩口の崩壊からほぼ垂直に近い掘り方を示し、床面には周囲に幅15cm、深さ5cmの溝が巡っていた。

堆積土は住居址柱穴との重複から、充分に層位の確認ができなかったがほぼ一括埋土の状況と推察された。

出土遺物（第20図）

埋土中より出土したが、風化が著じるしい。1は頸部の長い直口壺である。2は逆八の字状に開く頸部をもち、口縁端部は下方へ拡張され凹線がめぐる。風化しているため明瞭でないが、頸部には凹線がめぐっている。これらの土器は1がやや時代が新しく弥生時代後期後葉のものであるが、2は中期末と考えられる。

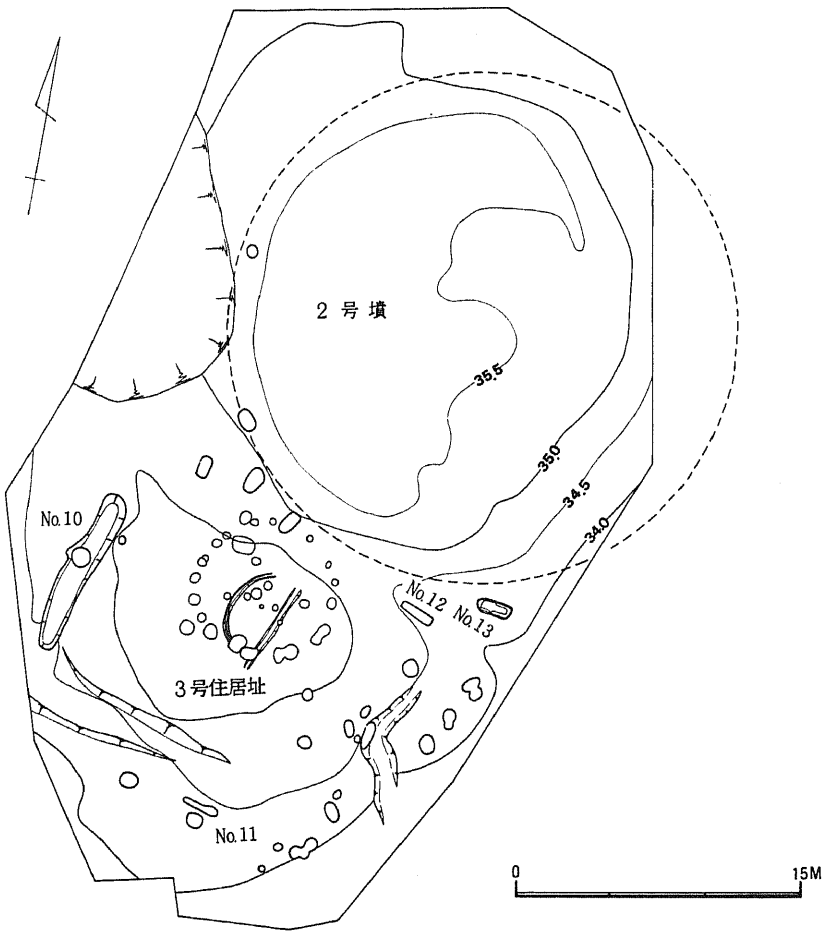


第20図　I区　No.14袋状ピット出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）

II　II区の調査

調査区南端の2号墳を中心とする南北長50m東西幅30mの区間をII区とした。この調査区はI区と同様全て竹藪におおわれ、大幅な地形の変形を受けていた。特に東側では1m以上の段差も認められ、2号墳墳丘東端部の一部はすでに削平されていた。

主要検出遺構は第1次調査による2号墳、3号住居址と本調査による2号墳周溝部の2基の土壙墓等であった。この土壙墓のうち1基から特殊器台型土器2本を接合して使用した棺の出土があり注目



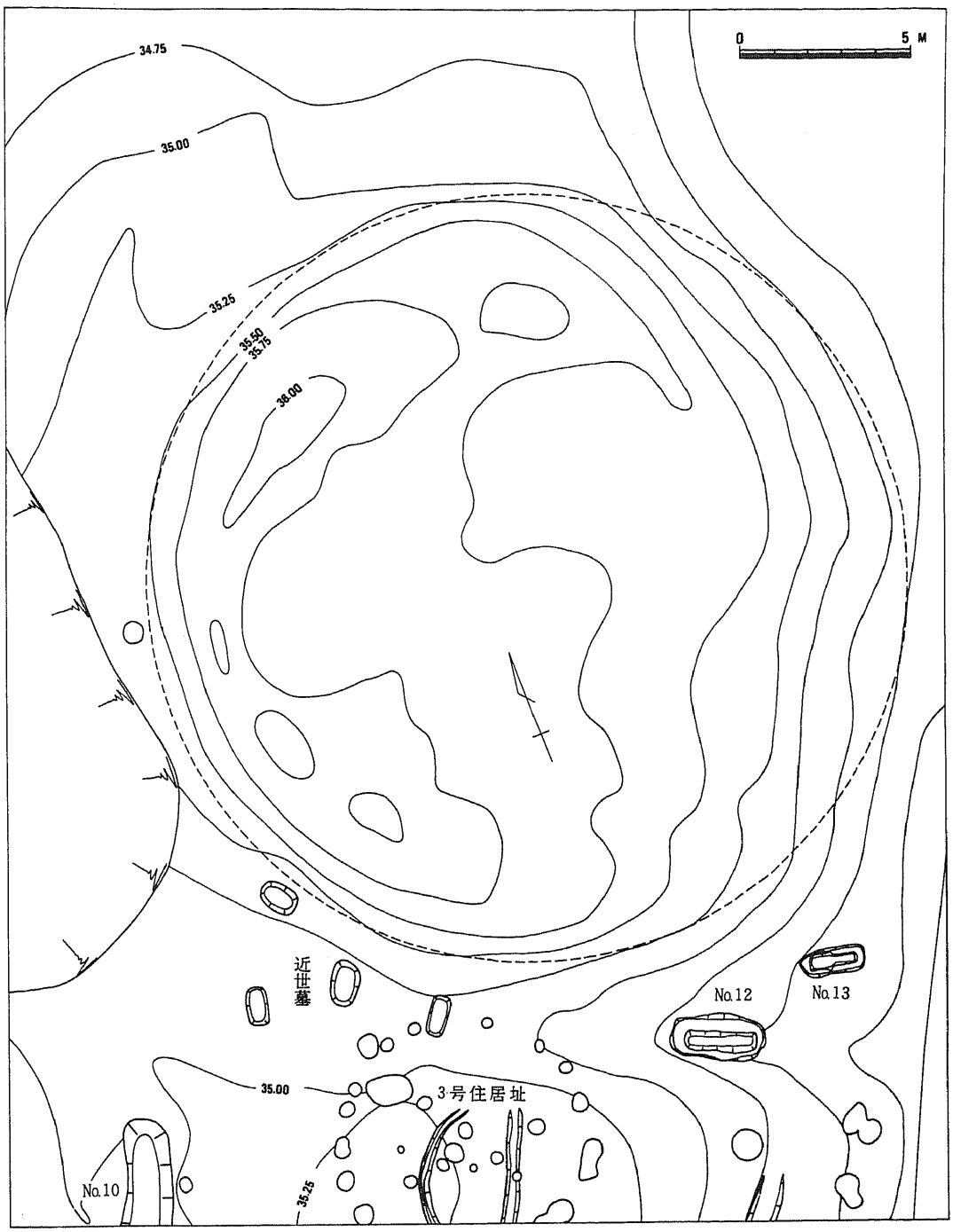
第21図　II区　全体図 ($S = \frac{1}{400}$)

された。他に近世墓等の各種のピットを検出したが、時期、性格については不明なものが多い。

なお、3号住居址の高まりが台状墓的遺構との指摘がありNo.12、13土壙墓もこれに関連したものではないかと考えられたが、周囲に認められた溝、段状の遺構が時期的に新しいことや、関連する遺物の出土がみられないこと等から台状墓状の遺構と断定できなかった。

(1)　2号墳（第22図）

1号墳と100mの間隔を置き開発区域南端の標高35.9mを測る舌状丘陵の最高所に位置している。調査前の地形観察からは尾根自体がやや高くなった状況が認められたのみで、墳丘等は確認できず、第1次調査のトレンチから周溝、墳丘等の遺構を検出し、この高まりに古墳の存在することが明らかになった。



第22図　II区　2号墳平面図（S＝$\frac{1}{200}$）

墳丘は大幅に削平され、中央がやや落ち込んだ状況で1号墳と同様に主体部、封土ともすでに破壊され、地山削り出しの基底部のみが残存していた。墳端部は第1次トレンチ調査からほぼ確認していたものの、全面調査を行った結果では当初想定していた場所よりやや東に中心がずれて位置していた。このため東側墳端部は一部で竹藪の造成により1m以上の段差のある部分にあたりすでに削平され消失していた。また古墳の位置する尾根東側直下に民家があり、丘陵からの土砂流出防止のため充分な拡張ができなかった。

周溝は墳丘南側に尾根を切断し、長さ25m、幅4～5m、深さ70cm前後にわたり掘り込み、その両端は漸次拡張しながら消滅している。北及び東側については周溝状の掘り込みが認められないことから、削り出しの墳丘のみで、周溝のなかった可能性が考えられる。

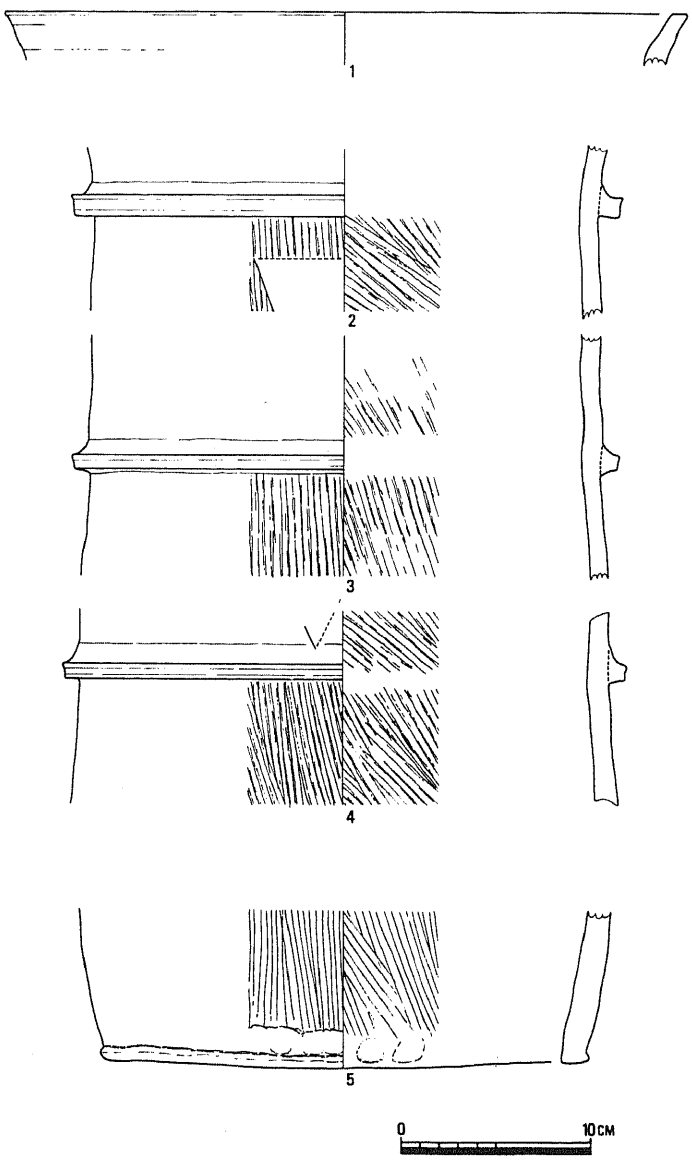
遺物は周溝内及び東・北側の墳端からかなりの量の埴輪片が出土しているが、いずれも原位置を止めず、墳丘部からの流入と考えられる。

以上の様に本古墳は1号墳と同様に封土・主体部ともにすでに消失し消滅寸前の遺構であったが、わずかに残存していた周溝と高さ1m程の地山削り出しの墳丘から径25mを計る円墳と判明した。

出土遺物（第23図）

2号墳は、すでに主体部とともに墳丘が削平されていたことから、墳丘外表の遺物、あるいは副葬品については明らかでないが、周溝内より円筒埴輪片が出土した。

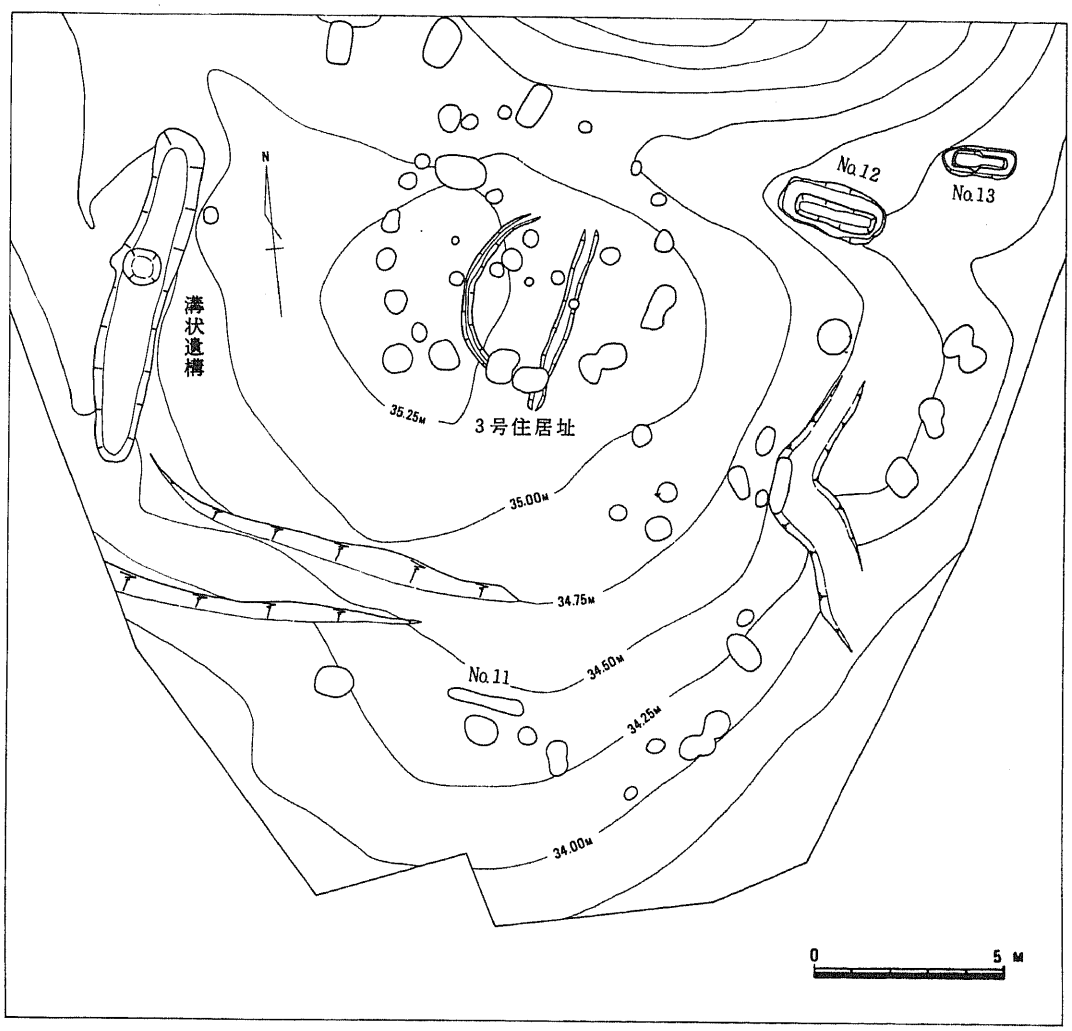
円筒埴輪は細片であるため全体の形状については明



第23図　II区　2号墳出土遺物（S＝1/4）

確にし難いが、図示し得た破片により概略は知り得るであろう。まず概形については円筒を呈することは言うまでもないが、口縁部は単純に外反するだけであるのか、それとも一度強く外反し、さらに上方に立上る二重口縁となるものかは断定できない。調整は口縁部が横ナデ、円筒部は外面がタテ刷毛で内面をナナメ刷毛によって行われている。底部の調整は内外面を押えつけて仕上げている。タガは断面でみると台形に近いが上側を上方へ僅かにつまみ上げており、端面には強いヨコナデによる凹部がめぐる。スカシ孔は逆三角と考えられる。これらの破片はすべて丹塗りされており、黒斑が認められるものもある。

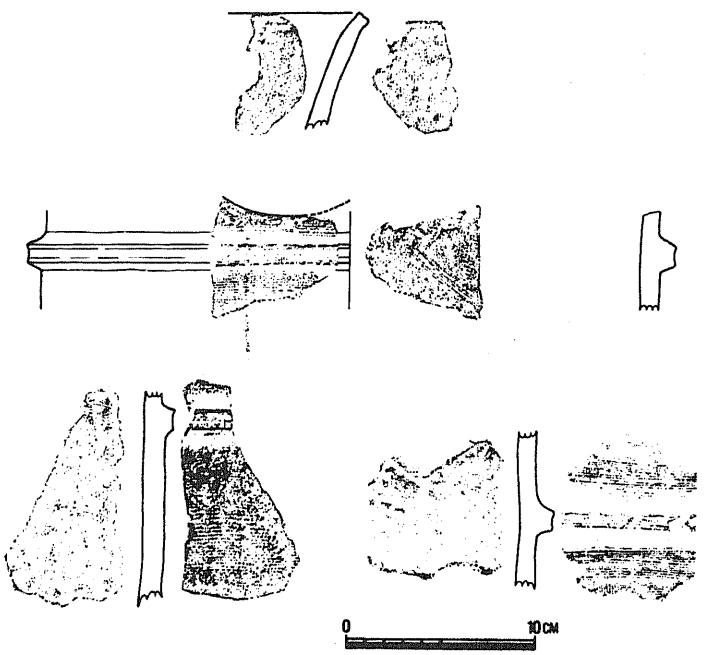
次に円筒埴輪の時期であるが、外面の調整がタテ刷毛であることや、タガの形状、スカシ孔が逆三角形であるなどの特徴は古い様相を呈している。川西宏幸氏の編年で示せば(註1) 第II期までにおさまるものであろう。とすると円筒埴輪でみるかぎり2号墳は1号墳より新しく築造されたものであり、その年代は四世紀後半、あるいは五世紀の初頭頃と推定される。



第24図 II区 3号墳付近平面図 ($S = \frac{1}{200}$)

(2) 3号墳（第24図）

II区南端の3号住居址の位置する地山のやや高くなった場所を3号墳とした。当初、この部分は2号墳築造時に周溝により切断された尾根頂部の残りと判断していたが、南斜面に2号墳と異質の埴輪片を検出したことから、すでに消滅した3号墳を想定した。したがって、墳丘封土、主体部はもちろん基底部すら明らかにできず、不明瞭な点が多い。



第25図 3号墳出土遺物（S＝$\frac{1}{4}$）

出土遺物（第25図）

古墳と考えられる高まりの南側より少量の円筒埴輪片が出土した。この埴輪片は2号墳のものとは一見して区別できるほど焼成、胎土とも異なっていた。このことから2号墳の南側の高まりを3号墳としたが、削平が著じるしくそれ以上に古墳と推定できるものはない。

調整は外面をヨコ刷毛、内面はナナメ刷毛の後でナデを行なっている。タガの断面は台形を呈するが、強いヨコナデにより端面に凹部がめぐる。スカシ孔は円形である。

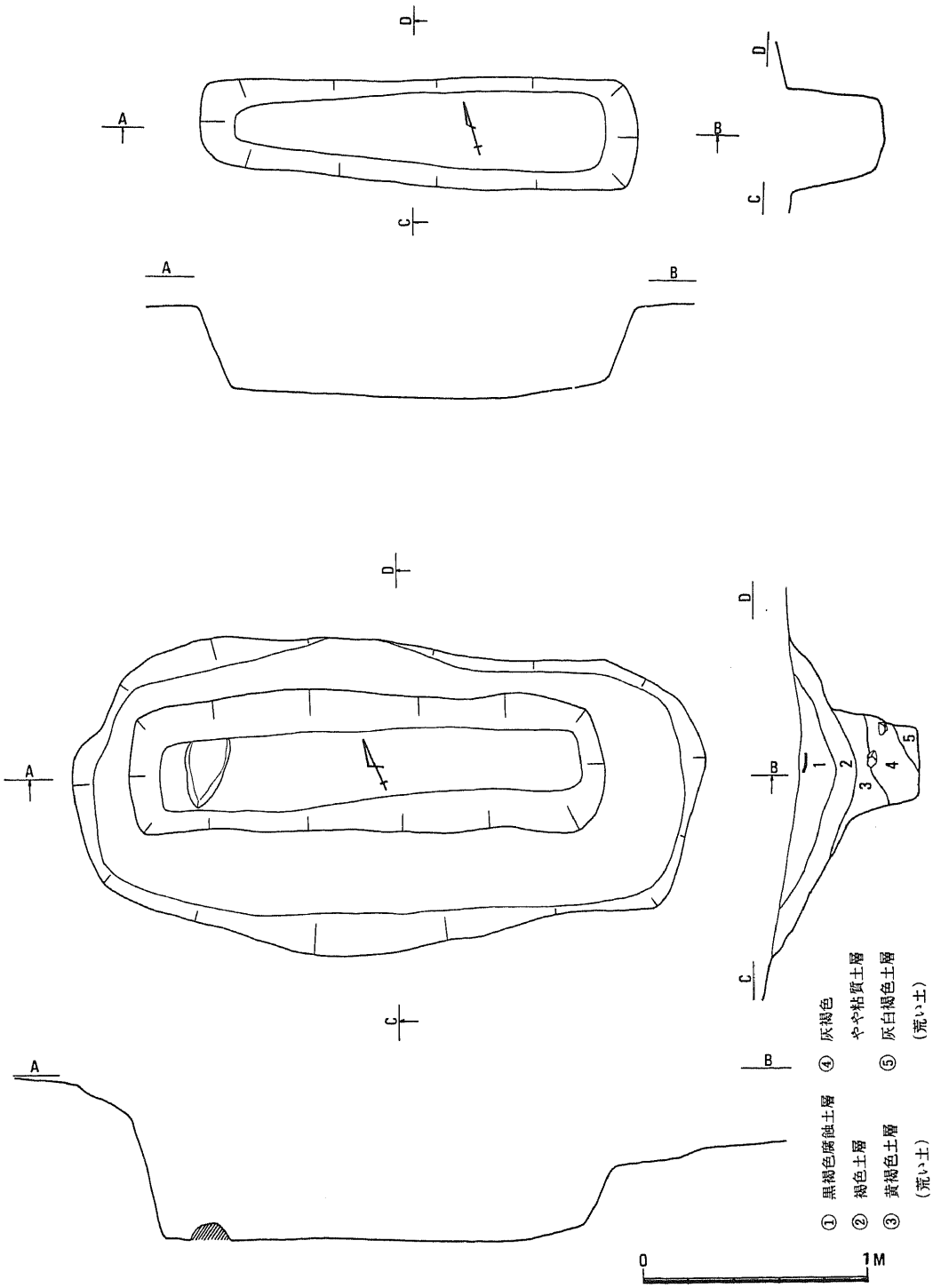
この円筒埴輪はヨコ刷毛の調整が行われていることや、スカシが円形となるなど、2号墳の円筒埴輪より後出のものである。これだけの破片で時期を決定することは無理であるが、5世紀代のものと考えられ、一応古墳と想定すれば、1号墳、2号墳に続く時期の築造と考えられる。

(3) No.11土壙墓（第26図）

II区最南端の2号墳から続く緩やかな南斜面上に検出した土壙である。主軸は尾根陵線にほぼ直交しE－15°－Sを測る。掘り方は東側小口が拡張する長方形の平面を呈し、上面で、長さ195cm、東小口幅50cm、西小口幅40cm、深さ40cm、床面で、長さ165cm、東小口幅35cm、西小口幅15cmを測る。床面はほぼ水平面を保ち、なんらの痕跡も認められなかった。

土壙内堆積土はややルーズで時期的にも比較的新しい遺構と想定される。

出土遺物は皆無である。



第26図　II区　No.11・12土壙墓実測図 (S = 1/30)　　L. 34.5m

(4) No.12 土壙墓（第26図）

2号墳周溝下にNo.13土壙墓と2.4mの間隔を置き同方向に検出した2段掘りの土壙である。主軸は尾根陵線とほぼ直交し、E－25°－Sを測る。土壙上段は明瞭な掘り方を示さず浅い段状を呈し、長さ2.8m、幅1.4mの不整形な長方形の平面である。下段はほぼ長方形の平面を呈し、長さ215cm、幅60cm、深さ55cm、床面で、長さ190cm、幅30cmを測る。床面はほぼ水平な面を呈し、西端に枕石状のやや扁平な石が認められた。

土壙内堆積土は中央がかなり落込んだ状況を呈し、上層には周溝内堆積土層が認められ、埴輪片が出土している。又、下層の土壙内からは高杯形土器片が出土している。

(5) No.13 土壙墓（特殊器台棺）（第27図）

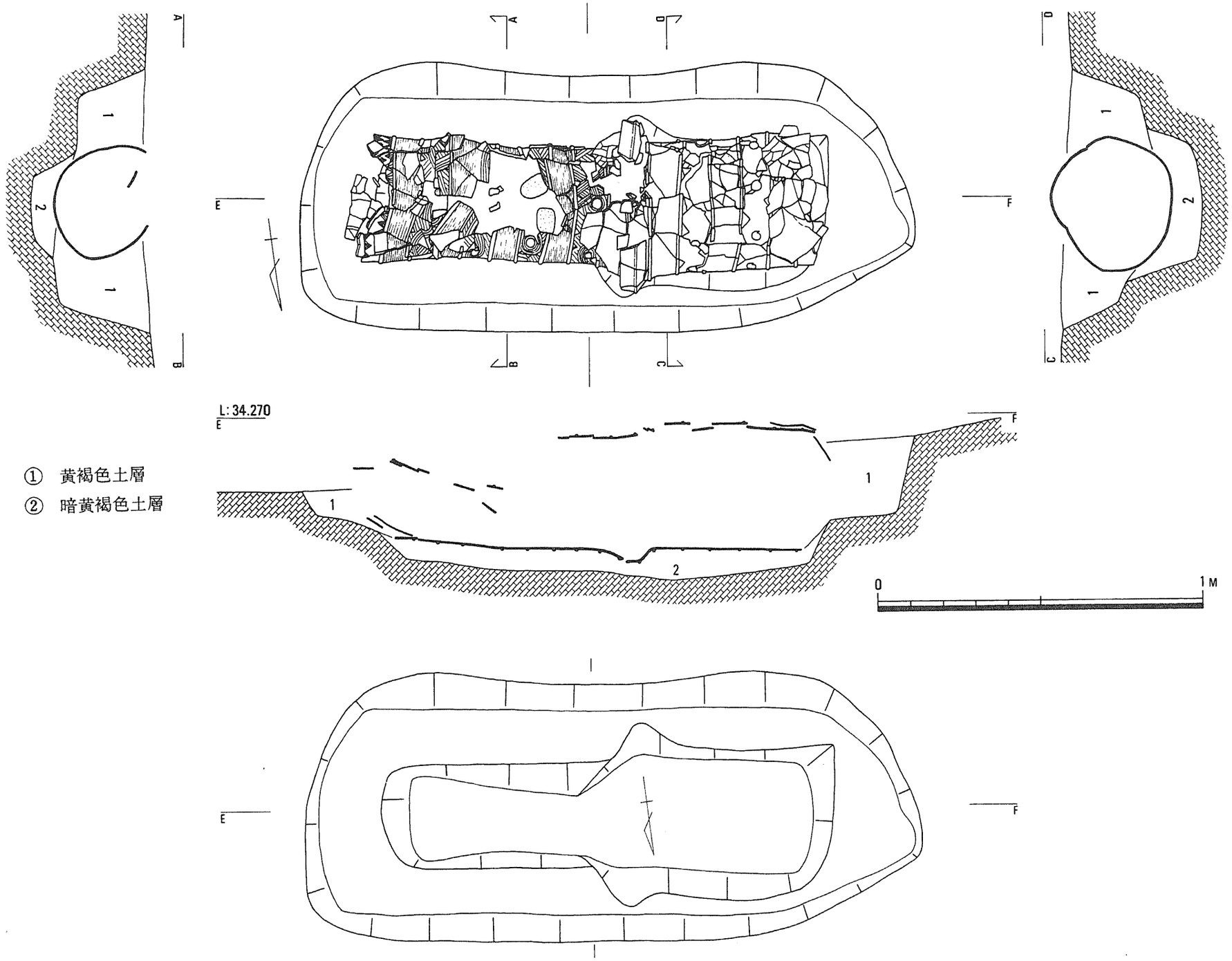
特殊器台棺は2号墳の東南部、尾根上平坦面が斜面へと移行する所に位置している。ここは2号墳の周溝内にあたり、その床面より検出したものである。特殊器台棺は土壙内に埋められており、周溝内床面下に破壊されずに残存していたことから、かなり深く掘りこまれていたものと考えられる。

土壙は2段に掘りこまれており、上段の掘り込みは特殊器台棺より広く、長さ193cm、幅90cmの隅丸長方形状を呈するが、西端は尖がったような形をしている。下段はほぼ特殊器台棺に合わせており、西側が幅広く、東側は細長く掘られている。特殊器台棺は下段床面に置かれるが、直接床面に接しているのではなく、暗黄褐色土を敷きその上に置いている。特殊器台棺は2本の特殊器台を用いており、西側の太い器台の脚部に細い器台の脚部を打ち欠いて差し込み、長さ145cmの棺にしている。棺の接合部には東側の細い棺と西の太い棺との空間部にカメを挿入してふさぎ、また両端も同じカメ片で閉塞している。東側の棺は上面の一部が破壊され、その部分に円礫が落ち込んでいた。特殊器台棺の内部には遺物は認められなかった。

特殊器台棺（第28・29図）

1は東側の棺で、口縁部と脚部が打ち欠かれており、径36cm、残存部高さ70cmを測る。胴部はすべて残存しており、文様帯が5段と間帯5段より成りたち、それぞれの幅はほぼ同じで約7cmである。文様帯は最下段より1段、2段と呼称すると、第4段文様帯までは横走する連続「S」字状文が施される。これは5条の「S」字を基本に、その連接部の中心に巴形透し孔を、そしてやや左右に片寄った上下に三角形の透し孔、さらに左右に「S」字に規制された略長方形状の透し孔を配している。最上段の第5文様帯は、鋸歯文を上下に配し、下辺凸帯に接して三角形の透し孔が認められるが、これが上辺にもあったかどうかは上辺の破片が少量のため確認できない。これら文様帯に挟まれた5段の間帯には、クシ目状の細くて浅い沈線が7本前後の単位でめぐっている。凸帯は丹を塗った後に貼り付けられているが、その位置にはあらかじめ沈線をめぐらせており、胴部全体の割付け痕と考えられる。凸帯の断面は下段ほどしっかりした台形を呈するが、上段ではやや丸みをおびる。

器壁は文様帯、間帯ともに同じ厚さで、内面は左方向へのヘラ削りにより調整されている。胎土に



① 黄褐色土層
② 暗黄褐色土層

第27図　II区　No.13 土壙墓特殊器台棺実測図（S＝$\frac{1}{15}$）

は細砂粒と金雲母を含み、色調は淡いチョコレート色を呈する。

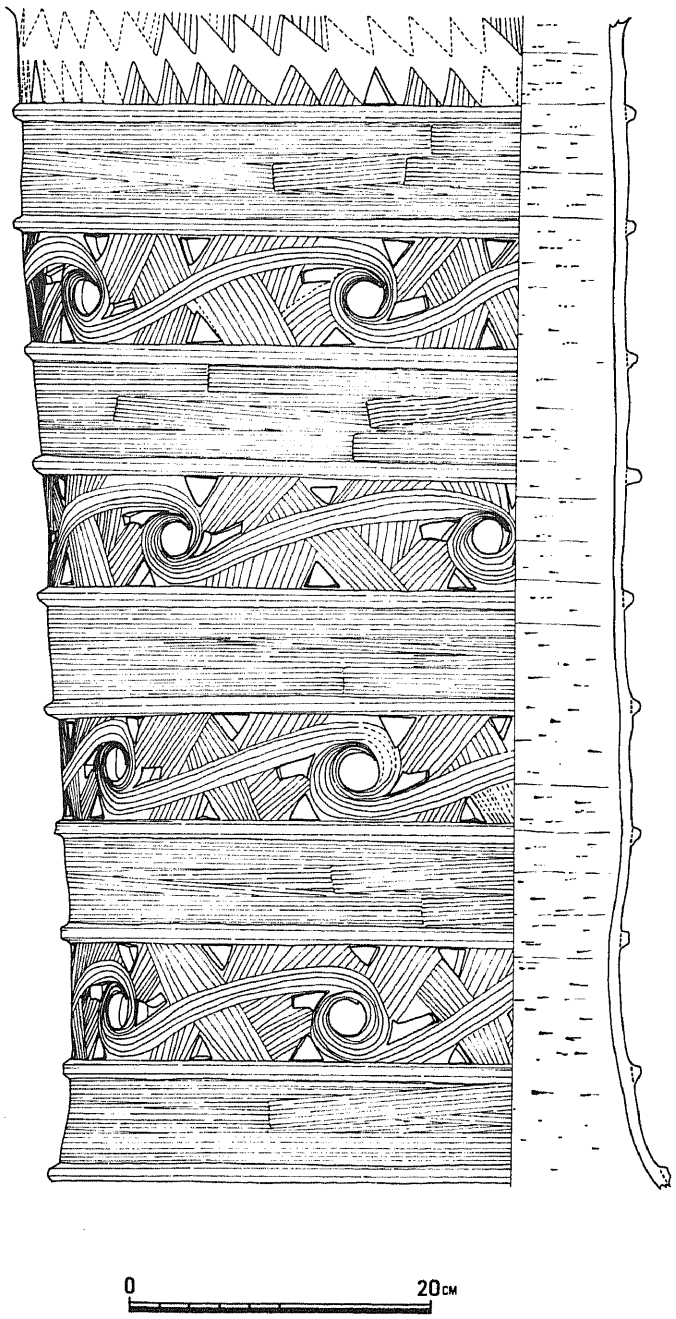
2は西側に位置していたもので、胴上部から口縁部を欠いている。現存部は高さ60cm、胴部径40cmを測り、全面丹塗りであるが、風化が著しく、文様も明確でない。

文様帯は3段とも同じ文様で構成され、二本の沈線内を斜線で埋めた連続「S」字状文を基本に、連接部に巴形の透し孔を穿ち、その肩部には上下凸帯に接して三角形透し孔が認められる。

間帯はクシ状工具による細くて浅い沈線がめぐっている。この間帯と文様帯の幅はほぼ同じで約8cmを測り、その境界に貼り付けられる凸帯は断面台形を呈する。

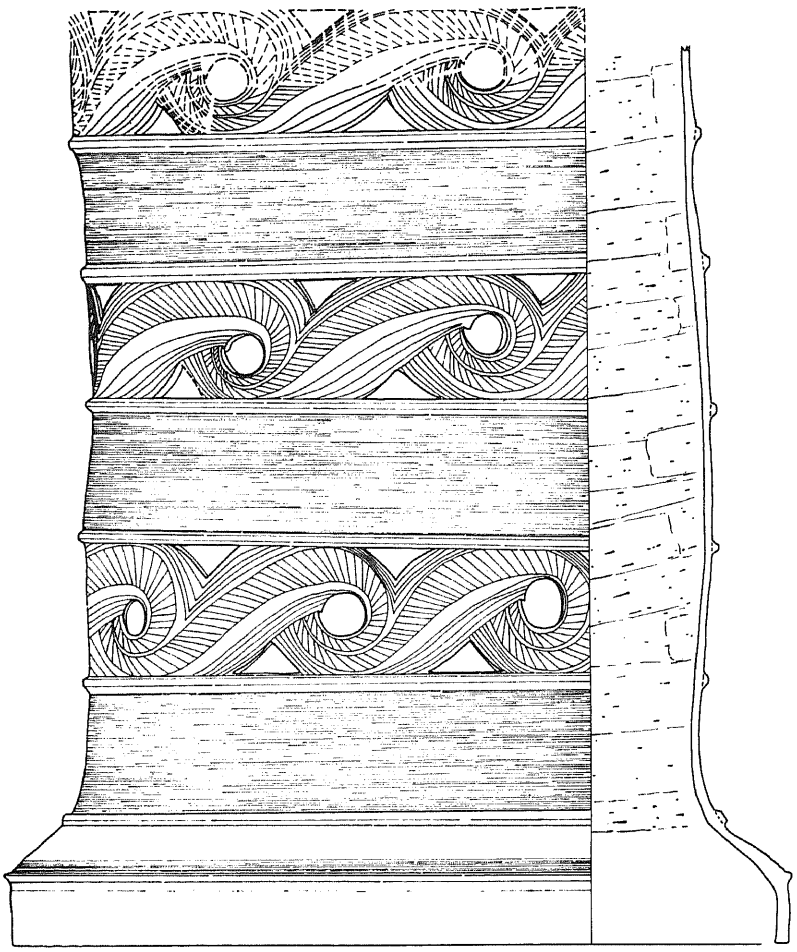
脚部は裾部がやや急な傾きとなり、屈折部に近い位置に凹線文がめぐる。屈折部は僅かに凸帯がめぐり、ここより脚端にむけてほぼ垂直な直立部となる。

器壁は胴部では内面のヘラ削りにより薄く仕上げられているが、脚部はやや厚みをまし、ナデによる調整が認められる。胎土には細砂粒と金雲母を含み、チョコレート色を呈する。



第28図　II区　特殊器台1実測図（S＝1/5）

以上の特殊器台以外に、両端、あるいは接合部を閉塞していたカメが出土している。細片化し、風化が著しいことから復元することができず、したがって図化することができなかったが、細片から観察できたことを記してみる。カメと考えられる土器片は胴部を主体としており、口縁部は認められな



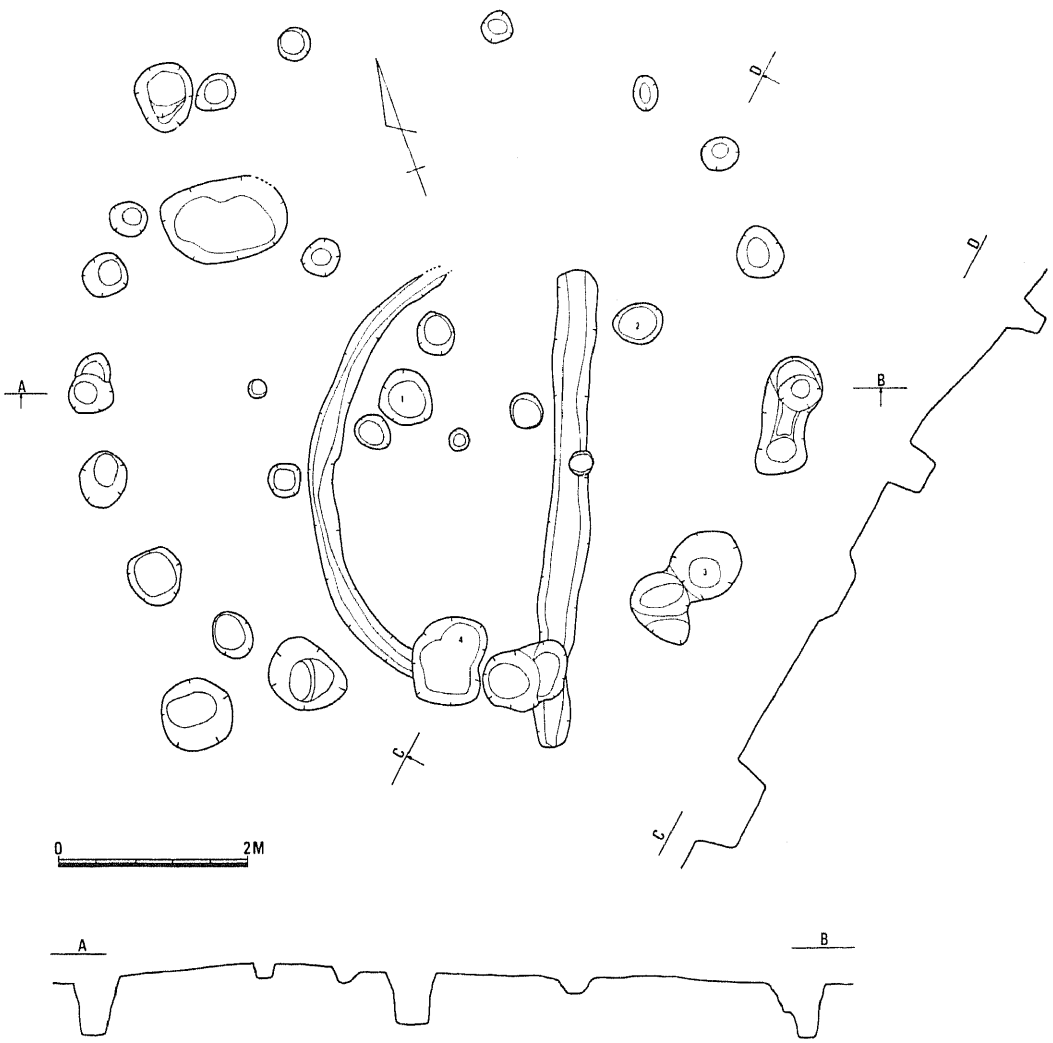
第29図　II区　特殊器台2実測図（S＝$\frac{1}{5}$）

かったが、口縁部に接する破片はあった。明確に底部であると断定はできないが、指頭圧痕が残る破片があり、底部あるいは底部に近いものと考えられる。これらの破片から推定しうることは、器壁はうすく、内面はヘラ削りが認められ、底部に指頭圧痕を残すことから、球形に近い胴部で、底部は丸底あるいはあっても痕跡ていどと言え、上東才ノ町II前後の時期と思われる。（註2）

さて土器片からの推定は確証がなく留保するとして、特殊器台から考えられる時期についてはどうであろうか。器台1は文様が吉井町あたご山出土（註3）のものに類似しており、狐塚省蔵氏編年の第II段階第II型式にあたる（註4）。器台2は西江遺跡出土中（註5）のもの、あるいは山陽町便木山出土（註6）のものに類似しており、これらは従来向木見型（註7）と呼ばれていたもので、狐塚氏

編年の第II段階第III型式にあたるものである。特殊器台の編年からすれば、時間差を感じさすものであるが、棺として同時に使用されており、これらは同時期と考えるのか、一方が儀礼に使用後一定期間をおいて転用されたものかは決し難い。いずれにせよ、弥生時代後期終末期に特殊器台の意義を失わせ埋葬用の棺へと転用されたものであろう。

このような特殊器台を棺に転用したものとして総社市宮山遺跡出土（註８）のものがあるが、編年的には西山遺跡のものが古い様相を呈している。宮山遺跡では墳墓群が認められ、特殊器台棺は前方後円墳の墳端に近い場所から出土しているが、西山遺跡では墳墓群と言えるようなものは検出できず、単独に築かれていた可能性が強く、続いて１号墳、２号墳などの古墳群が築かれている。



第30図　II区　３号住居址実測図（S＝$\frac{1}{80}$）　　L. 35.5m

(6) 3号住居址（第30図）

3号住居址は壁体溝が一部残存しているのみで、本来の床面はすでに削平されているものである。柱穴もやや不規則であるが、4本柱と考えられる。少量の土器片から弥生時代後期のものと考えられる。

この3号住居址とは別に径約7mに柱穴が円形に検出されている。住居址と考えられるが、削平をうけ、床面はなくなったものと思われる。しかしこの円形に並ぶ柱穴が同時に使用されたとは考えられず、何回かの建替によってこうなったのであろう。この住居址については遺物がなく、所属時期については明らかでない。

(7) No.10 溝状遺構（第24図）

II区南西端に検出した長さ9m、幅1.5m、深さ30cm程を測る溝状遺構である。底部レベルは北端から南に向って徐々に低下し、−30cmの高低差が認められた。またこの遺構のほぼ中央には、底面を径1m、深さ10cmに掘り込んだ円形の焼土面が認められ、かなりスミを含んでいた。溝からは弥生式土器、もしくは土師器の小片の出土があった。

註1　川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌第64巻第2号』1978

註2　伊藤晃・柳瀬昭彦・池畑耕一・藤田憲司「上東遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書第2集』岡山県教育委員会 1973
柳瀬昭彦・江見正巳・中野雅美「上東・川入」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16』岡山県教育委員会 1977

註3　孤塚省蔵「岡山県吉井川あたご山遺跡出土の“器台・壺”」『考古学雑誌63巻3号』1977

註4　孤塚省蔵「吉備型器台論（上）・（下）『異貌4・5』1976

註5　田仲満雄・正岡睦夫「西江遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告20』岡山県教育委員会 1977

註6　神原英朗「便木山遺跡発掘調査報告」『惣図遺跡発掘調査概報、岩田第3・5号墳発掘調査概報』赤磐郡山陽町教育委員会 1971

註7　近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」『考古学研究13巻3号』1967

註8　高橋護「三輪山墳墓群の調査から」『岡山県総合文化センター館報No.39』1963

第4章 結 語

立地と範囲 発掘調査の結果から当遺跡は小田川下流域の広大な沖積低地を眼下に望む標高30～35m程の舌状低丘陵上に位置していることが明らかとなった。この低丘陵は標高297.2mを測る高馬山から南東に派生した丘陵の端部にあたり南北長400m、東西幅100m程の舌状を呈す。このうち造成工事による調査対象区域は丘陵中央部の南北200mの区間であった。丘陵尾根は、東西の水田面との比高差20m程を測り、遺構を検出した尾根筋ではゆるやかな起伏を持ち幅15～20mの平坦面を形成している。

当遺跡発見以前の丘陵上の周知の遺跡は丘陵中央部の西斜面に岡山県遺跡地図、真備町No.32剣塚と記載されている横穴式石室墳が1基認められるのみで、調査期間中行った付近の実施踏査からも遺物の散布は認められなかった。また、北端部は遺跡発見時にすでに造成工事により掘削され、何らの遺構・遺物も確認できない状況であった。

この様に横穴式石室墳以外に丘陵両端部への遺構の広がりを現状では肥握できなかったが、尾根上の平坦部は調査区域内と同様の地形を呈している状況等から、検出した集落址、墳墓遺構等の未調査区域への広がりが充分想定され、総延長400mにわたる当丘陵上全域を遺跡の範囲とみなすのが妥当であろう。

調査区域内の主要検出遺構は弥生時代中期末から後期後半にわたる竪穴住居址3軒（うち2軒には建替えによる重複）、貯蔵用と考えられる袋状ピット8基を中心とする集落遺構と弥生時代末～古墳時代初頭の土壙墓4基、古墳時代前半期の古墳3基による墳墓遺構とに大別できる。このうち、調査区南端のII区からは総社市三輪山墳墓群に次ぐ出土2例目の特殊器台形土器を使用した器台棺の発見が行われ大きく注目されるところとなった。

集落遺構 先ず、検出した3軒の竪穴住居址と8基の袋状ピットによる集落遺構についてみると、南北200mの調査区域内の丘陵尾根から緩斜面にかけての平坦部に集中する傾向が認められた。ただ調査区内外ともに全般にわたり竹藪、畑の開墾により大幅に削平された場所が多く、検出遺構以外にもかなりの遺構が存在した可能性は強い。東西の丘陵斜面については、急傾斜を示す地形状況や実施踏査、並びに第1次のトレンチ調査の結果から遺構・遺物の発見は行えず、調査の対象とはなしえなかった。

各遺構の残存状況は袋状ピットが比較的良好なものが多いのに較べて住居址では3号住居址の如く、わずかに周溝や柱穴のみにより判明したものも認められた。また最も残りの良好な2号住居址は4回程の建替えが行われ貼床面の施設や柱穴、周溝が複雑にからみ合い重複遺構の調査精度の高さが要求された。

一方、8基の袋状ピットは調査区北半の尾根線上にやや集中する傾向が認められた。いずれも底径1m前後のほぼ同形同大の形状を呈し、深さも残存良好なもので最大1m近くを測る。これらのピッ

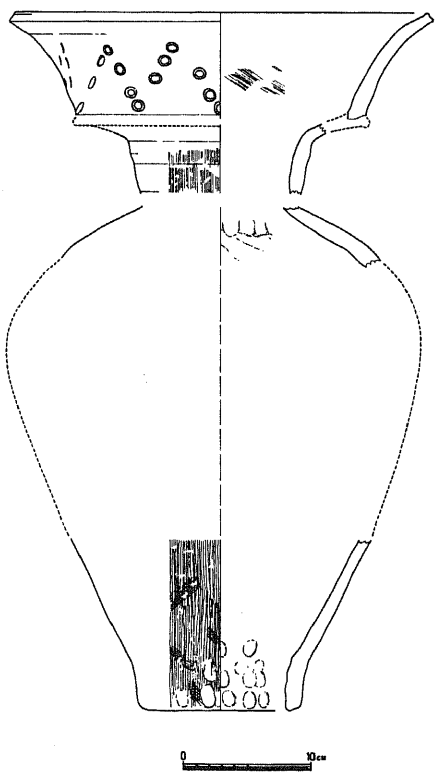
トは竪穴住居址に伴う貯蔵の機能を持った遺構と想定され、県北にその類例を数多く見出すことができる。

3軒の竪穴住居址と8基の袋状ピットの出土遺物は岡山県南の弥生土器編年に対応すると上限が中期末に始まり下限を後期後半の時期とすることができる。また、各遺構も、2・3号住居址内の重複や、1号住居址と14号ピットの切合が認められる如く、長期にわたり同丘陵上に存続したことがうかがわれ集落構成の一端を示すものといえる。

墳墓遺構　次に墳墓遺構では、弥生時代末～古墳時代初頭の土壙墓と古墳時代前半期の円墳を集落遺構と同様に調査区全般にわたり検出した。特にII区南東端に検出した2基のほぼ同時期とみられる土壙墓のうち、東側のNo.13土壙墓内からは特殊器台形土器2本を接合して使用した器台棺の出土をみた。

これらの土壙墓の周辺は2号墳墳丘の大幅なカットや3号住居址の劣悪な残存状況等からみてかなりの削平を受けており既に消失した土壙墓も考えられるが、この2基以外には精査したにもかかわらず、同種の遺構を見出すことができなかった。ただ西斜面は2m以上段状にカットを受けており、この部分に土壙墓の広がっていたことも考えられる。しかし、いずれにせよ、大規模な土壙墓群の可能性は薄い。

特殊器台形土器の出土は岡山県を中心に既に50か所以上にのぼる。このうち特に出土分布の濃密な地域は県南西部に集中する傾向が認められる。当町内からも本遺跡北東3.5kmの総社市との境の伊与部山山頂の墳墓遺跡、また北西3kmに同じく総社市新本との境の立坂遺跡、さらに西2kmの黒宮遺跡等からの出土が知られている。しかし、器台棺としての出土は東方6kmに位置する著名な総社市宮山遺跡群中から昭和38年発見されたものについで2例目である。



第31図　1号墳壺形埴輪復元図(S＝1/6)

器台棺の形状は両遺跡出土例とも土壙内に複数の器台を接合、安置し、周囲に若干の石をつめている。ただ本遺跡の器台棺には中央接合部と東端部を土器片をもってふさいでいることがやや異なるのみで副葬品もともに皆無であった。

調査区の北端と南端に検出した3基の古墳はいずれも大幅に削平を受け主体部はもとより封土すら確認できない状況であった。1・2号墳ではわずかに地山の基底部と一部周溝を確認したのみである。また3号墳については当初古墳とは認識できず、埴輪片の出土をもって2区南端の地山のわずかな高まりを古墳痕跡と想定するにすぎない状況であった。

したがって古墳の時期決定となる遺物は1号墳ではわずかに残存した東西の周溝内の壺形埴輪類、2・3号墳では周溝内及び周辺より出した円筒埴輪片のみによらざるをえなく明確にしがたい面が多い。

1号墳周溝内からやや粗いが、均一な胎土を持ち、丹塗りを行い、二重口縁の底部穿孔の壺形埴輪の出土をみた。これらは墳丘に設置されたものか周溝内に投棄されたものか、現状ではさだかではなかったが、2・3号墳出土の円筒埴輪と比較し、やや古い様相の埴輪類と認められた。

1号墳出土壺形埴輪(第31図)はいずれも破片の図上復元図であるため、口縁部と底部が同一個体でなく他の破片が伴うことも充分に考えられるが、底部から胴部に向う外開きの器壁は体部球形とは考えられなく、図化の如く、やや腰高の肩の張気味の器形と想定される。この様な器形は県内公表資料中には見出すことができず、県外出土例として、福岡市所在の全長90mを測る、前方後円墳の老司古墳の墳丘上から本古墳に類似するものが報告され、5世紀初頭から中葉にかけての築造とされている。(註1)また、香川県木田郡権八原古墳群中の箱式石棺を主体部に持つ小円墳の周溝中に等間隔で設置され出土していると云う。(註2)一方、体部が球形で、筒状の頸部を持ち、二重口縁の器形は畿内の桜井茶臼山古墳、大市墓等に見られ、県内では都月1号墳出土の壺形土器に類例を見出すことができる。いずれも発生期の古墳である。また、4世紀末～5世紀初頭の築造とされる県内の著名な前方後円墳である金蔵山古墳の墳頂部からはやや退化した二重口縁を持ち球形の体部のやや後出の壺形土器の出土例がある。集落遺跡の上東遺跡にも1点類似土器が認められ、亀川上層式に編年されている。

この様な類似の出土例と比較すると本墳出土品は口縁部外面に施された竹管文が畿内庄内式土器等に見られる竹管円形浮文の影響とみられることや、奈良天神山古墳や都月1号墳に認められる頸部中央部がややふくらみ気味で上半部の開く筒状の頸部に類似することや外反する二重口縁部の諸特徴から推察して古留式土器以前の古式土師器の範中に入ることは云えるであろう。

さらに底部穿孔面に残るハケ目痕やヘラ磨き痕が、平底を有す土器の底部穿孔との指摘があること(註3)や肩部が張り、底部に向ってすぼまる特徴は弥生時代後期の県南部の器形の系譜を引くと見られること等から、畿内の壺形土器の影響を受けながらも吉備独自の系列を持つ壺形品である可能性も考えられる。

また、2・3号墳は出土した円筒埴輪の整形の諸特徴より2→3号墳の築造が想定された。

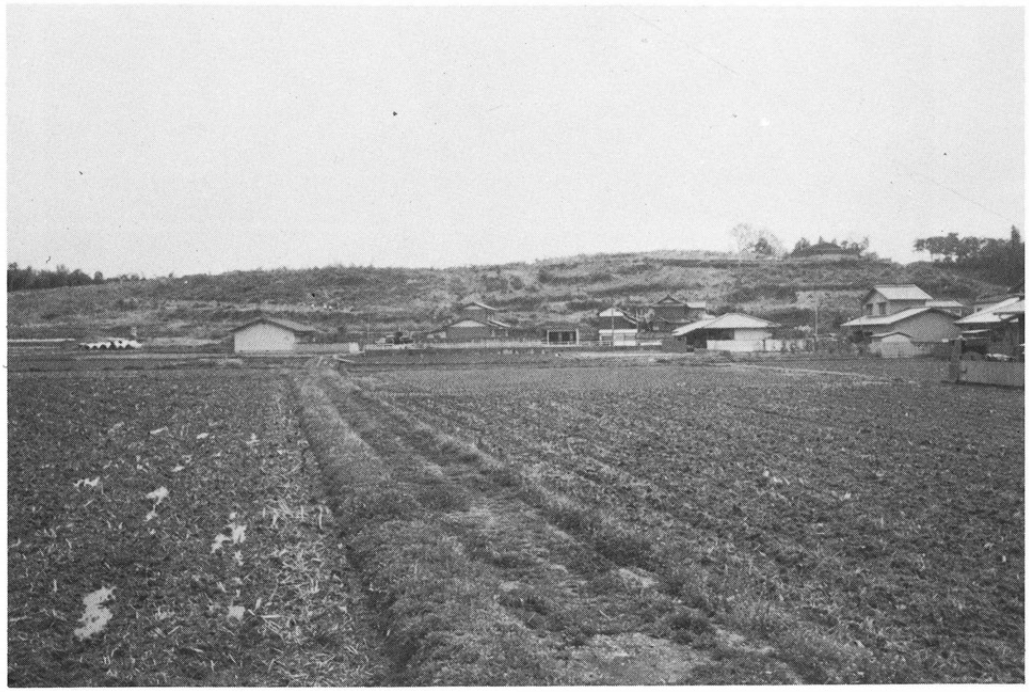
この様に、当丘陵上では3基の古墳が北方より順次1→2→3号墳と築造された様相を呈し、古墳時代前半期に径25m級の中規模な古墳を築造しえた吉備中枢部の被葬者の系譜を同一丘陵上の古墳の位置からある程度とらえられるものとなろう。

註1　九州大学文学部考古学研究室『老司古墳』福岡市教育委員会 1969

註2　松本敏三氏の御教示による。

註3　底部穿孔土器については、高橋護氏の有益な御意見・御指導をたまわった。
なお高橋氏の御教示によれば、宮山墳墓群の所在する同一丘陵上の古墳より同様な底部が出土しているという。

図版 1

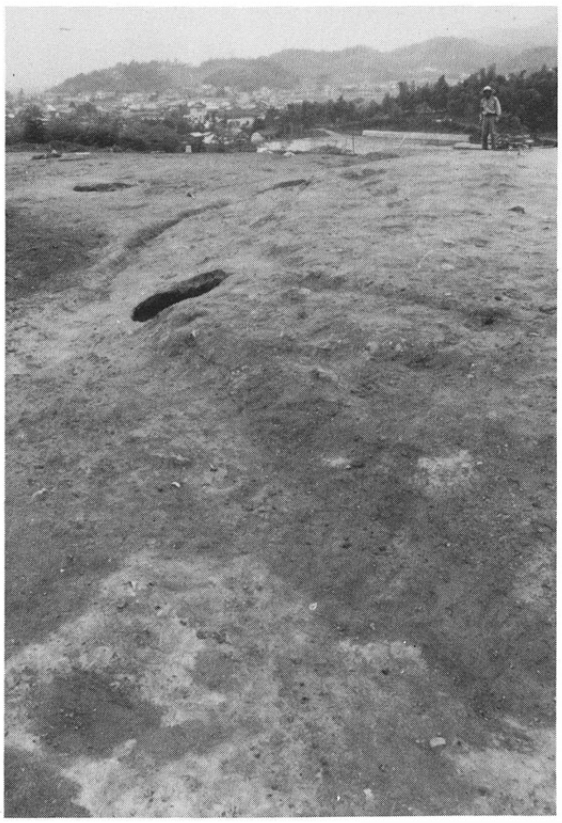


(1) 西山遺跡遠景（西から）

(2) 調査区全景（北から）

図版２

(1)　Ⅰ区　１号墳周辺（南から）

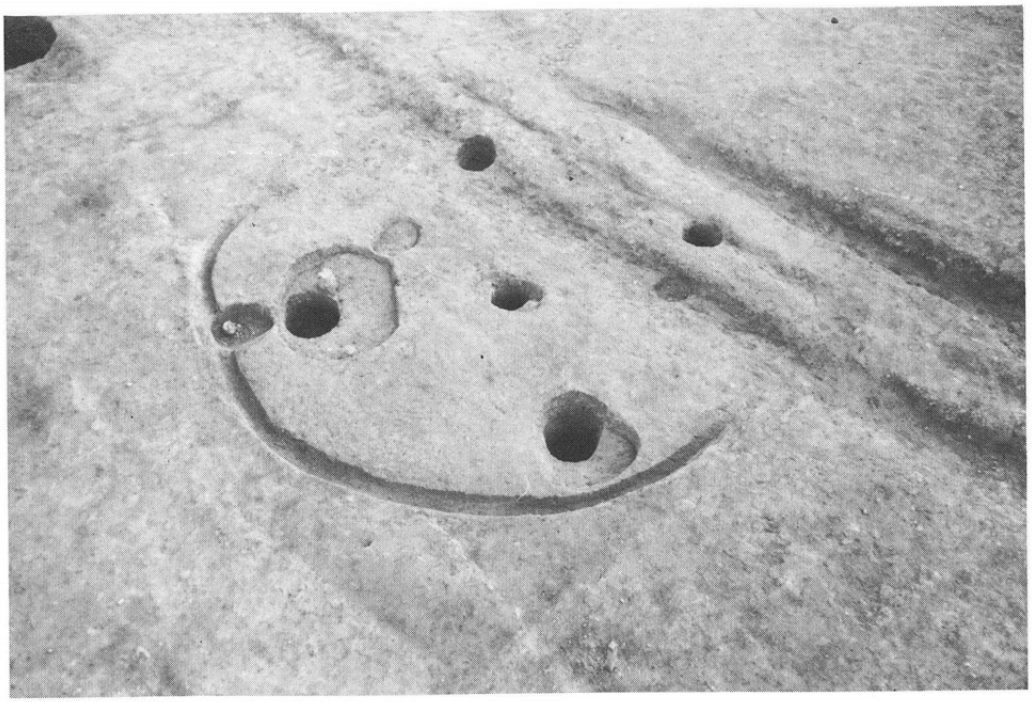


(2)　Ⅰ区　１号墳墳端部（東から）

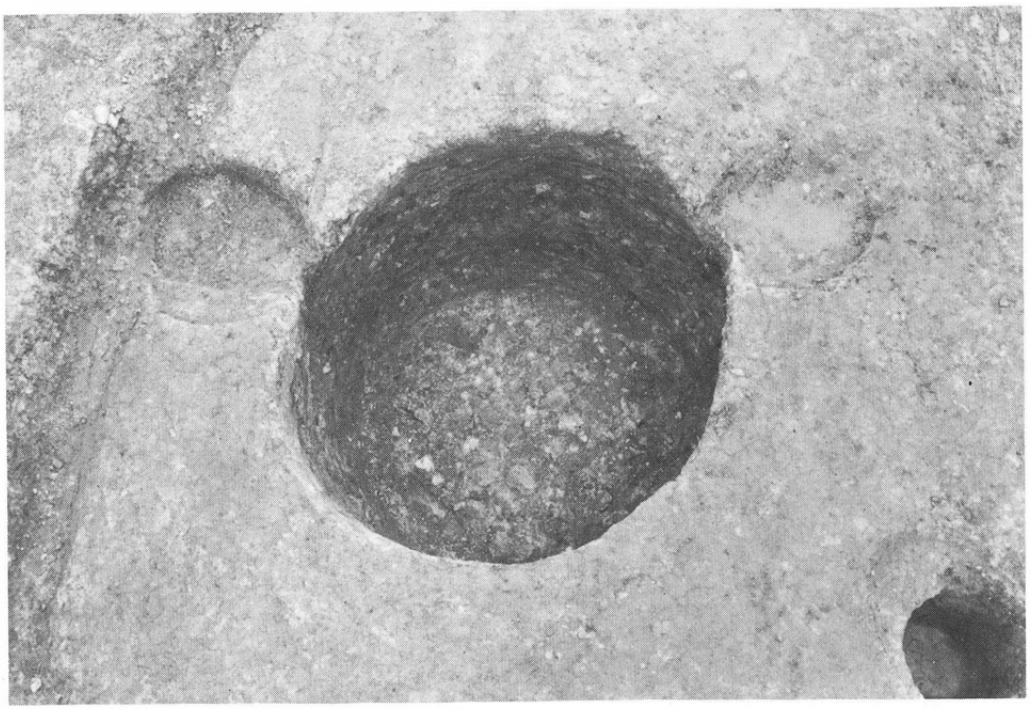
(1)　Ⅰ区　１号墳西側周溝遺物出土状況（南から）

(2)　Ⅰ区　１号墳西側周溝遺物出土状況（東から）

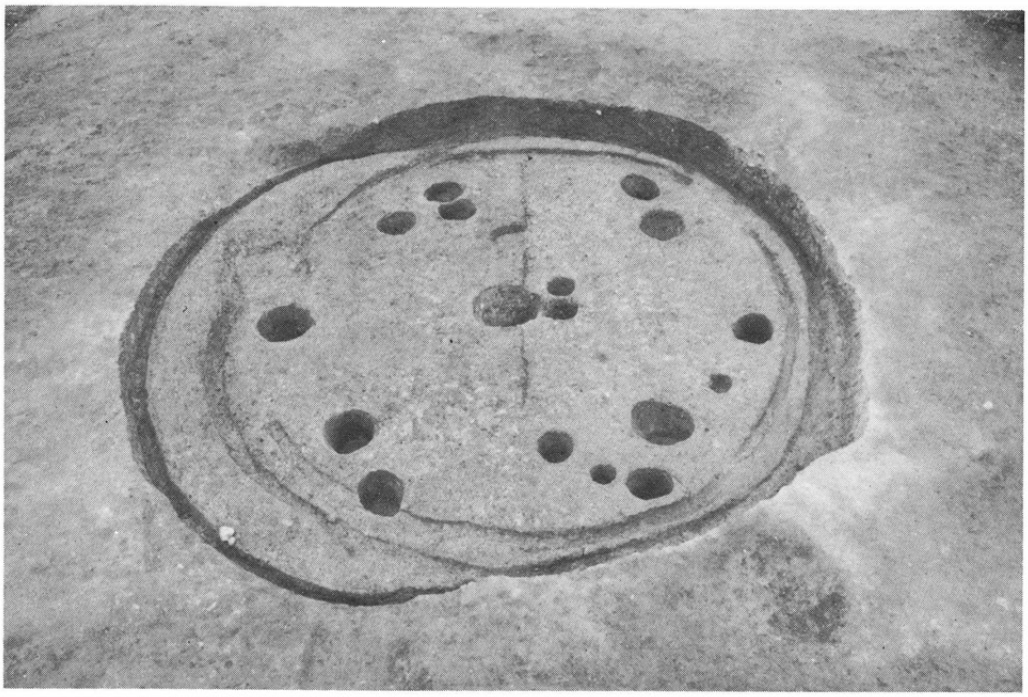
図版４



(1)　Ⅰ区　１号住居址（北から）



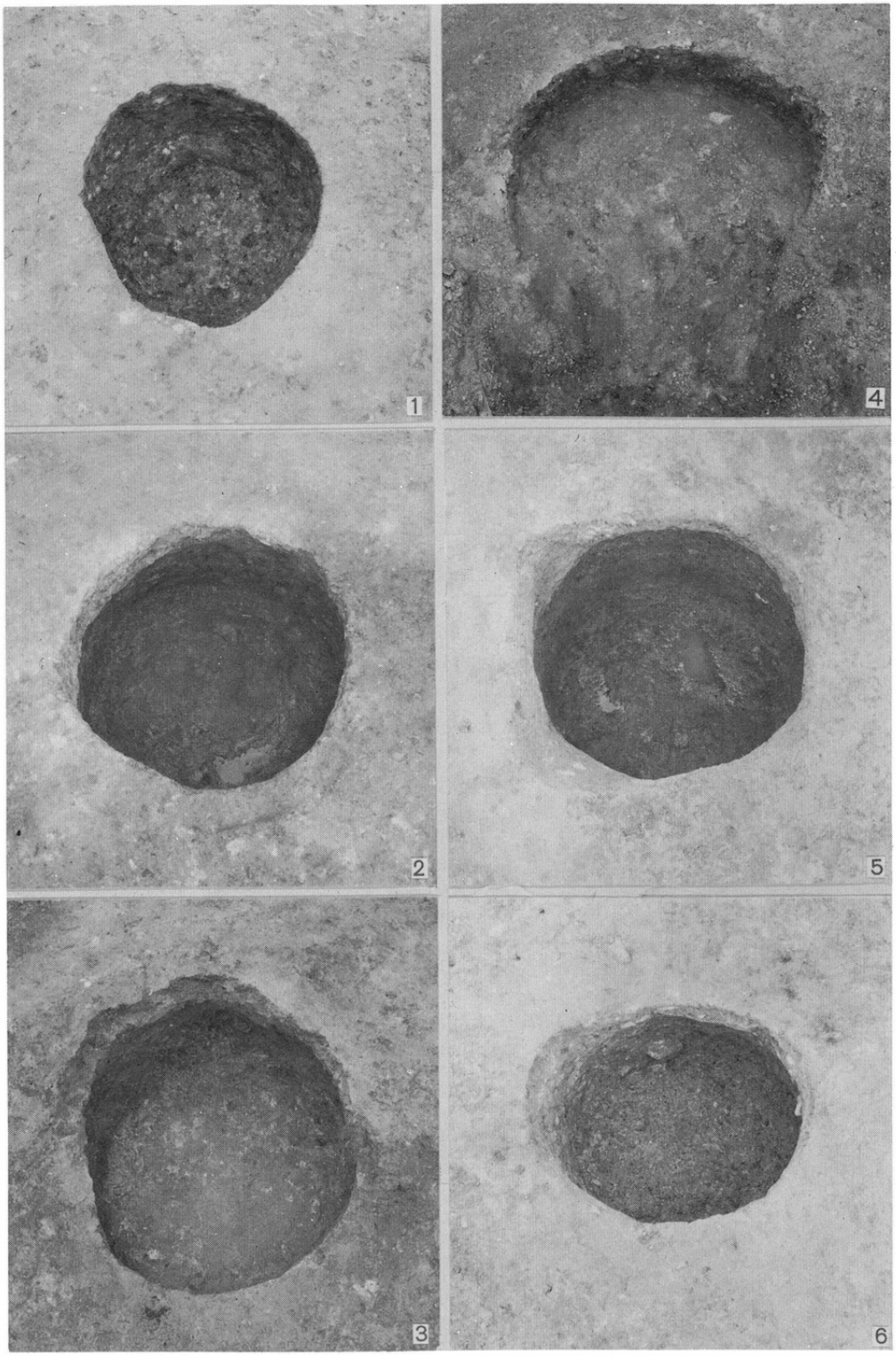
(2)　Ⅰ区　No.14 袋状ピット（北から）



(1)　Ⅰ区　２号住居址（南から）

(2)　Ⅰ区　２号住居址土層断面（西から）

図版6

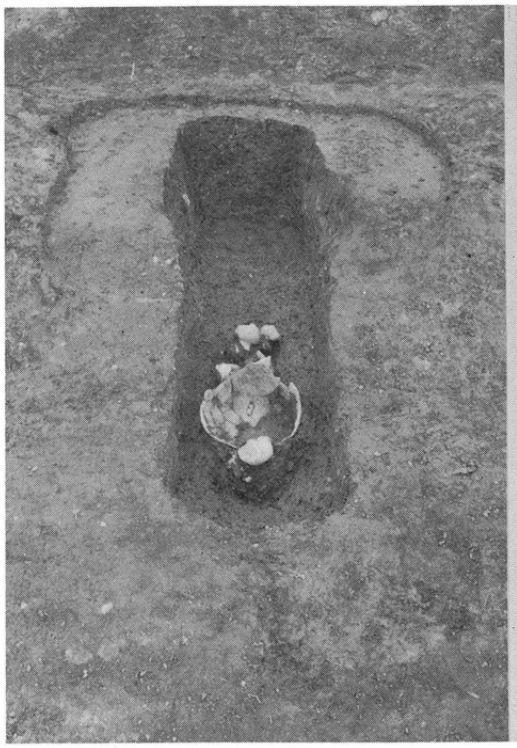


(1)　Ⅰ区　袋状ピット　1－No.1（南から）2－No.2（東から）3－No.3（南から）
4－No.4（北から）5－No.6（北から）6－No.9（南から）

(1)　Ⅰ区　No.５袋状ピット（北から）

(2)　Ⅰ区　No.５袋状ピット土層断面（西から）

図版8



(1)　Ⅰ区　No.7 土壙墓遺物出土状況（西から）

(2)　Ⅰ区　No.7 土壙墓（西から）

(3)　Ⅰ区　No.7 土壙墓遺物出土状況

(1)　II区　２号墳周辺（南から）

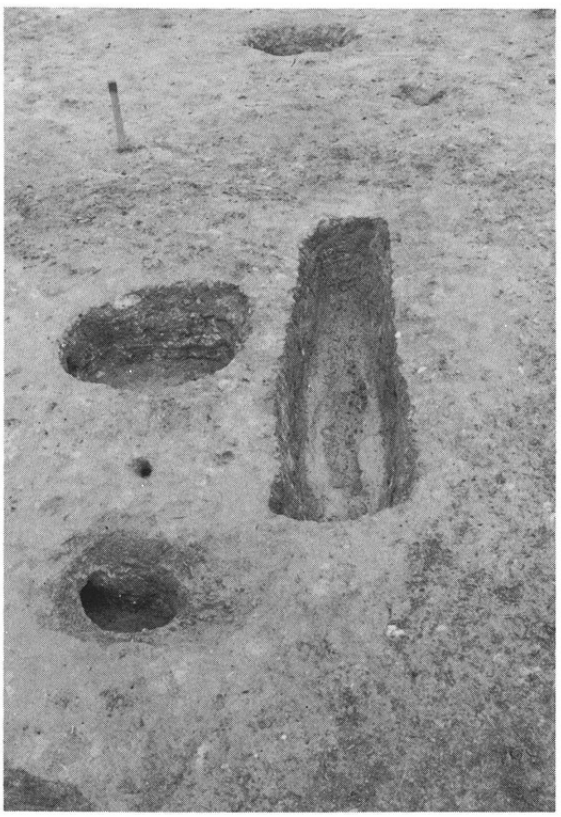
(2)　II区　南半部全景（北から）

図版10

(1)　II区　3号住居址（南から）

(2)　II区　No.10 溝状遺構（北から）

(1) II区 No.12・13土壙墓（西から）



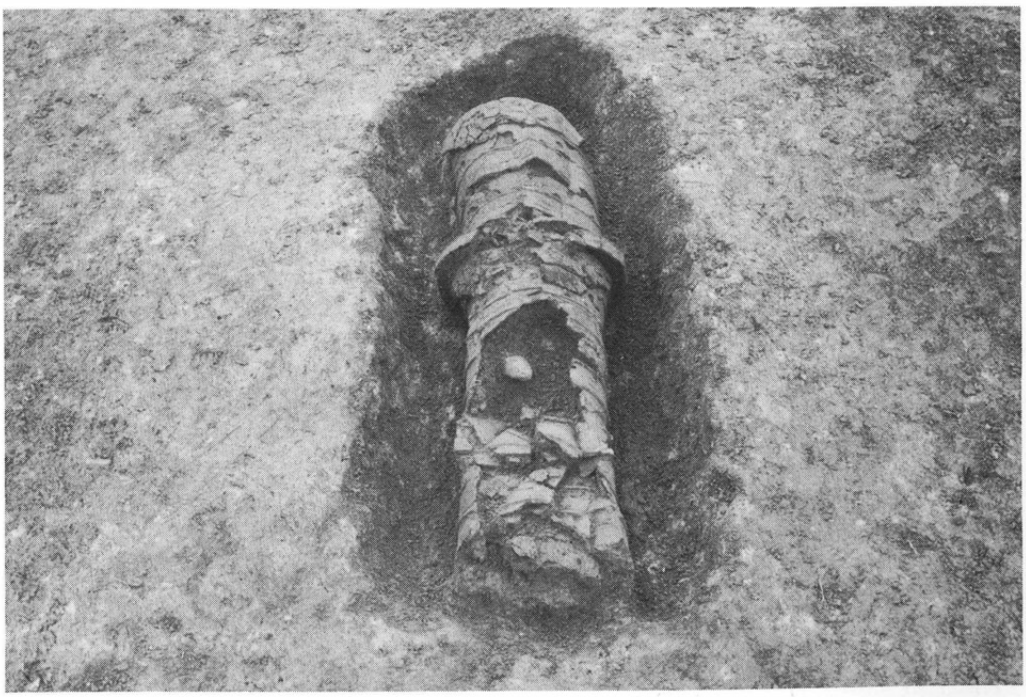
(2) II区 No.11土壙墓（西から）

図版12

(1)　II区　No.12 土壙墓（西から）

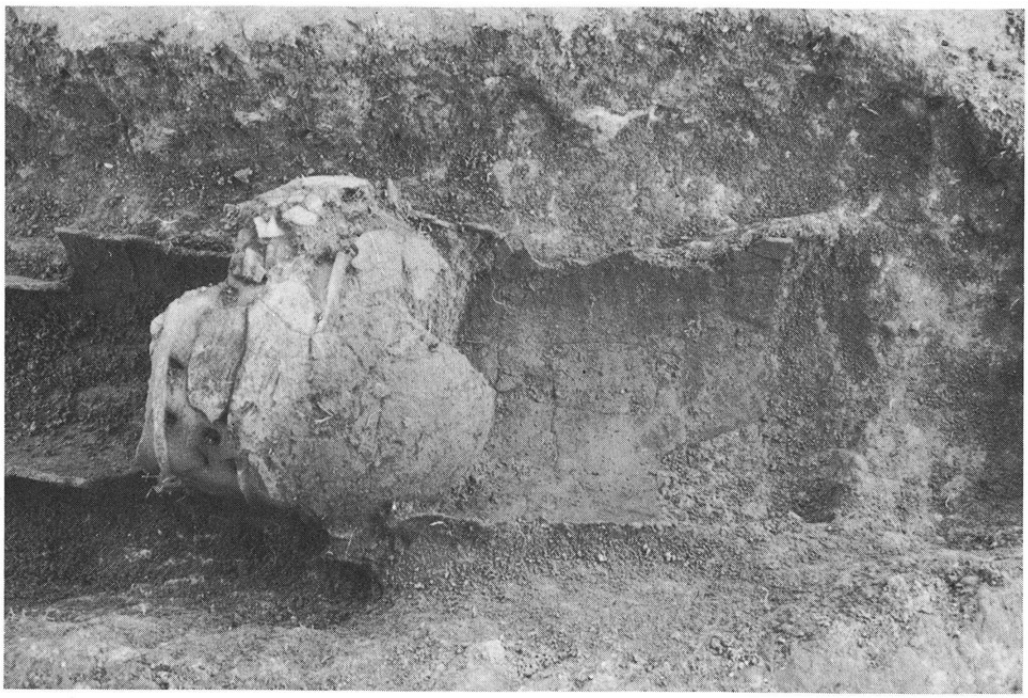
(2)　II区　No.12 土壙墓土層断面（西から）

(1)　II区　No.13 土壙墓特殊器台出土状況（南から）



(2)　II区　No.13 土壙墓特殊器台出土状況（西から）

図版 14



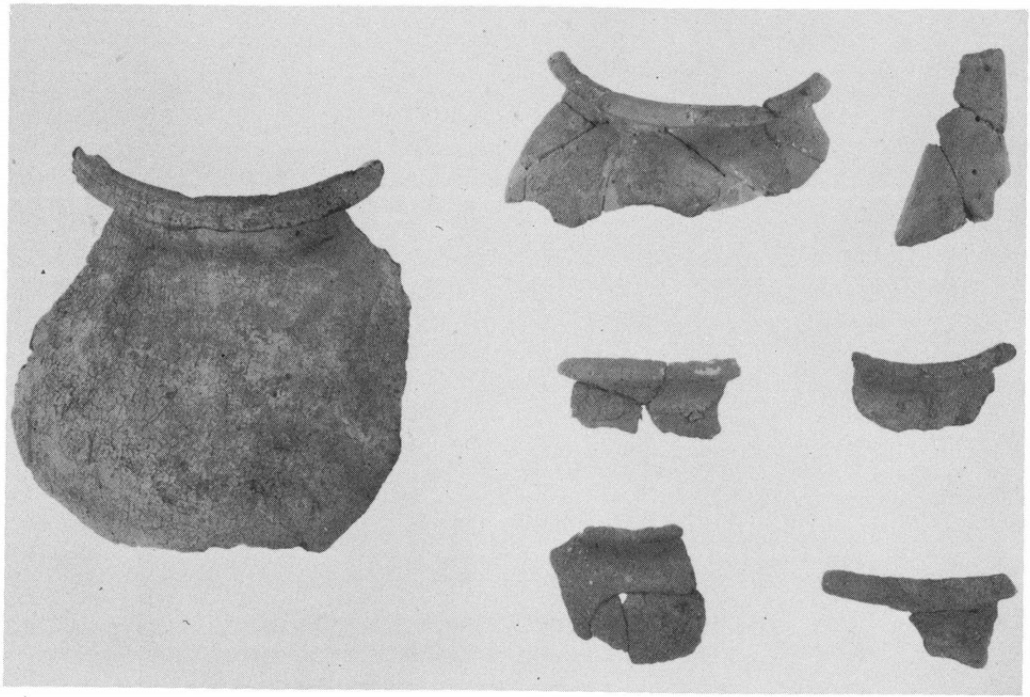
(1)　II区　No.13 土壙墓特殊器台接合部（北から）

(2)　II区　No.13 土壙墓特殊器台接合部（西から）

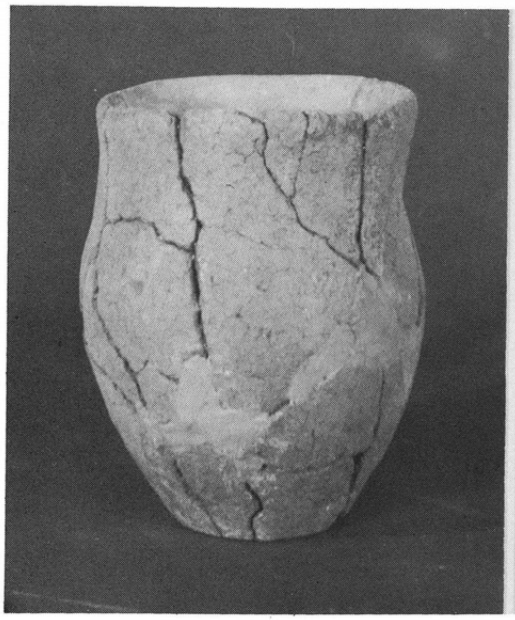
(1)　II区　No.13 土壙墓特殊器台下半部（南から）

(2)　II区　No.13 土壙墓特殊器台完掘状況（西から）

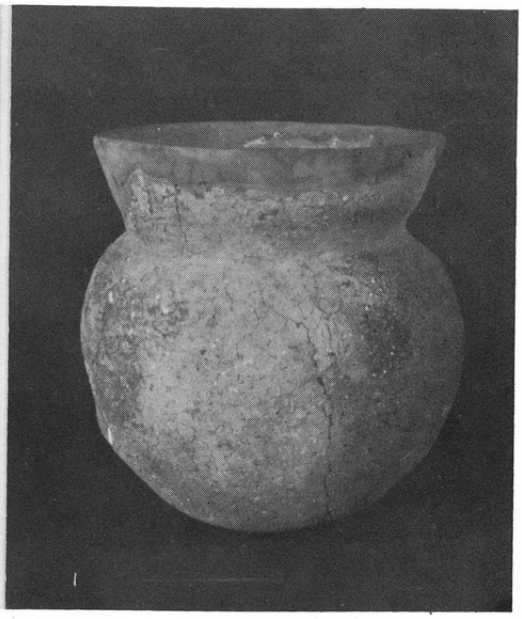
図版16



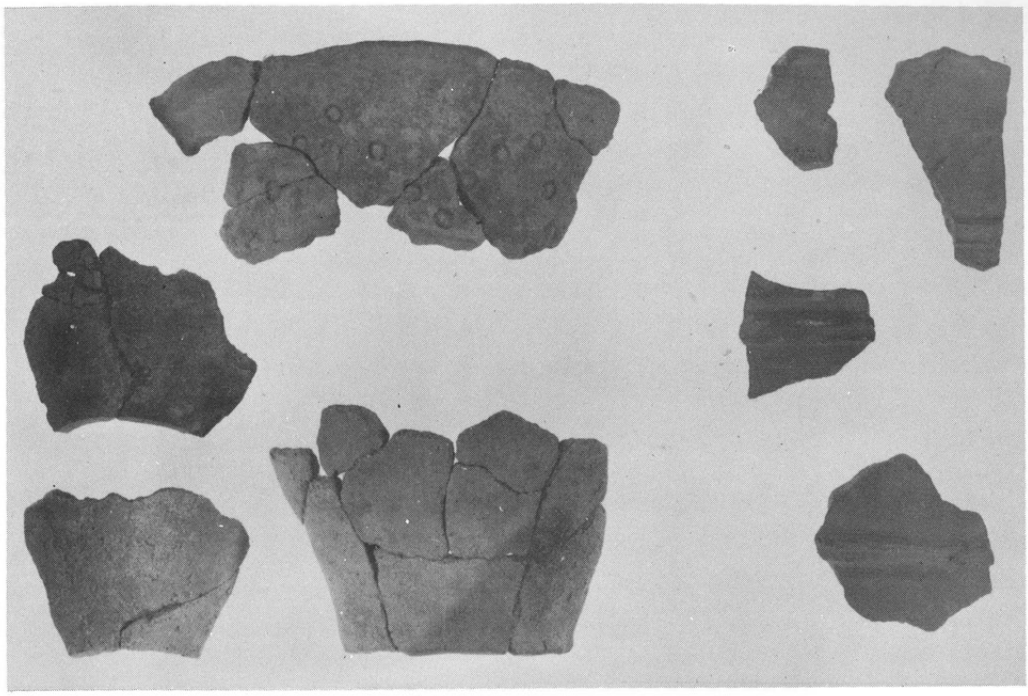
(1)　Ⅰ区　住居址・袋状ピット出土遺物



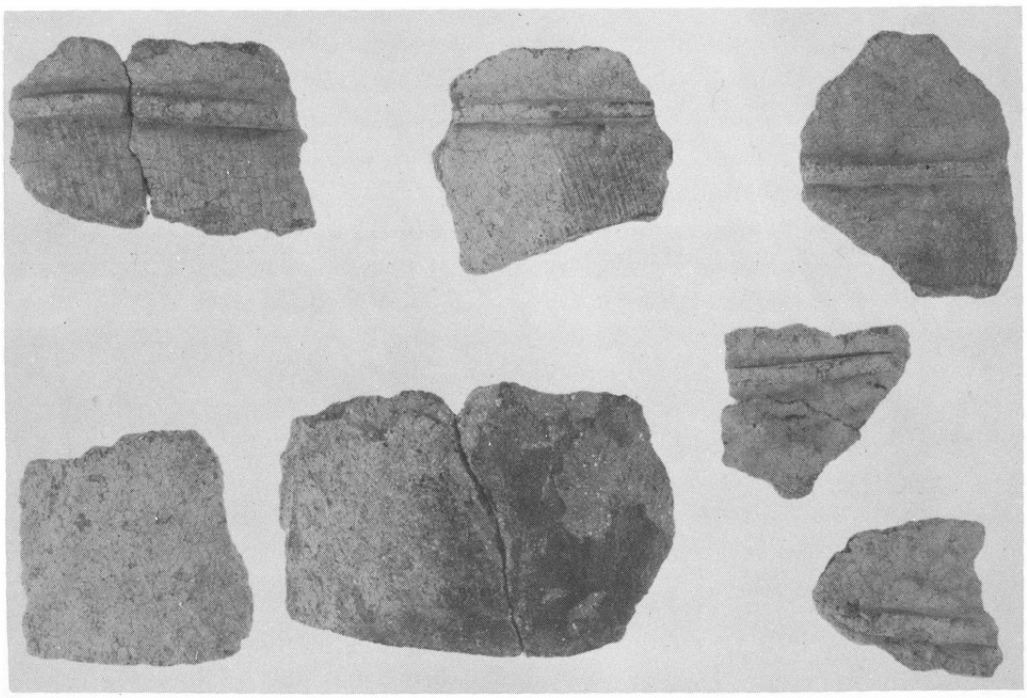
(2)　Ⅰ区　No.9 袋状ピット出土遺物



(3)　Ⅰ区　No.7 土壙墓出土遺物



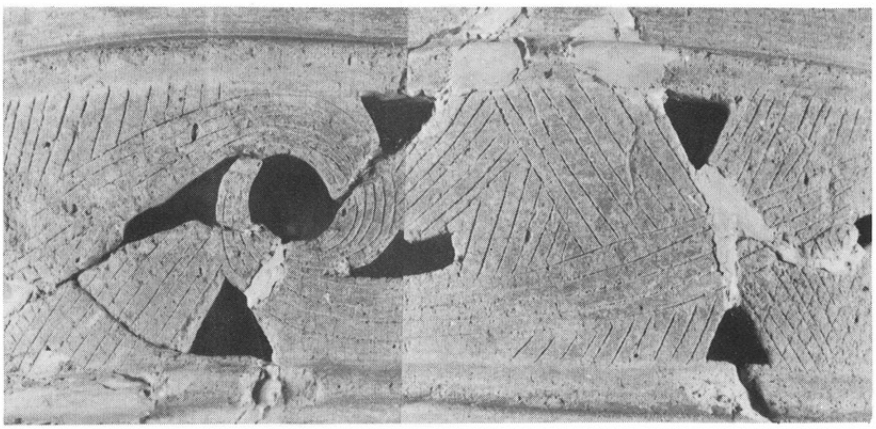
(1)　I区　1号墳出土遺物(左)　II区　3号墳出土遺物(右)



(2)　II区　2号墳出土遺物

図版18

(1)　II区　No.13 土壙墓 特殊器台2



(2)　II区　No.13 土壙墓 特殊器台1　文様

西　山　遺　跡

1979年10月31日発行

編　集　大木建設㈱新王子団地
　　文化財発掘調査委員会

発　行　真備町教育委員会
　　岡山県吉備郡真備町箭田1679

印　刷　岡山県農協印刷株式会社
　　岡山市富町5－27